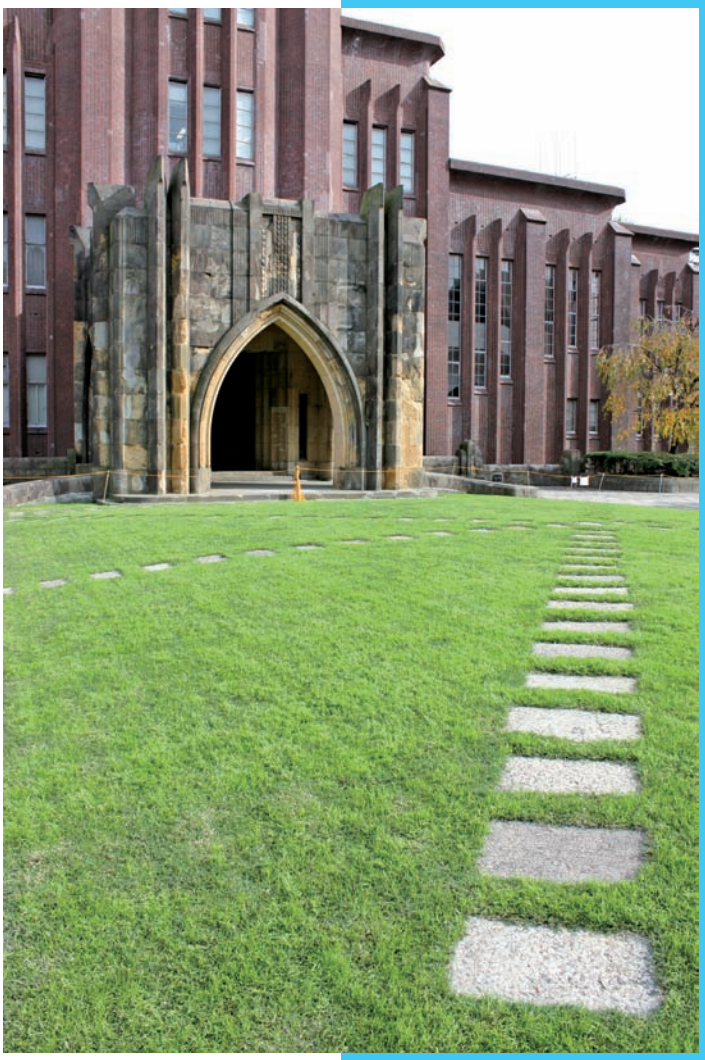
東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

学内広報

for communication across the UT



特集：平成21年度第1回学生表彰
「東京大学総長賞」授与式開催

2009.11.20

No.1392

特集　平成21年度第1回学生表彰「東京大学総長賞」授与式開催

平成21年度第1回（秋）は、学業以外の課外活動等を対象として募集を行い、合計25件の推薦をいただき、学生表彰選考委員会の厳正なる審議の結果、個人3件、団体2件の計5件が受賞者として選出され、10月20日（火）に授与式が開催されました！

日　時

10月20日（火）
17：00～18：00
大学院数理科学研究科
大講義室
（駒場Ⅰキャンパス）

受賞者全員との記念写真

総長賞を授与される
西脇さん

総長賞を授与される
安藤さん

総長賞を授与される
笠井さん

授与式では、総長から表彰状と記念品が受賞者に贈呈された後、各受賞者から今回の受賞内容に関するプレゼンテーションが行われ、それぞれの活動に対する思いや関係者への感謝の意等が述べられました。

なお、本授与式には、本学学生、教職員、本学OB・OG等、約230名が参加し、賑わいのある祝福と交流の場となりました。

式　次　第

奏楽　東京大学音楽部管弦楽団
（平成14年度第2回受賞団体）演奏

《授与式》
- ○選考結果報告
- ○表彰状及び記念品の授与
- ○総長挨拶
- ○受賞者プレゼンテーション
- ○記念撮影

《懇談会》
懇談
「ただーつ」斉唱　運動会応援部
（平成14年第1回受賞団体）

海洋調査探検部硫黄島島遺征隊
のプレゼンテーション

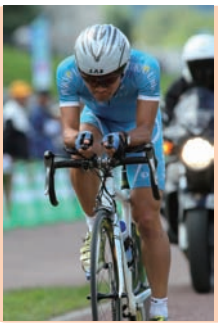
法科大学院出張教室
のプレゼンテーション

更なるご活躍を
期待します！

■本件問合せ先：本部学生支援グループ　山形（内線：22514）

受賞者紹介

【個人】3件



西薗　良太（工学部3年）

西薗氏は第21回全日本学生個人ロードタイムトライアル自転車競技大会において優勝し、団体戦においても4位という過去最高の結果を残した。今年8月末に催された第65回全日本大学対抗選手権自転車競技大会ロードレース（通称インカレロード）においても優勝し、東大自転車部創設以来のインカレ優勝を果たした。さらに昨年度2位で終了した同連盟主催の年間を通したシリーズ戦である全日本学生ロードレースカップシリーズ戦ですでに三勝を挙げ、現在（第六戦を終了した時点で）1位をキープしている。自転車競技伝統校がひしめく中、並み居る強豪を倒してのインカレの優勝は特筆すべき大活躍であり、高く評価された。

笠井　友貴（教育学部4年）

笠井氏は将棋の女性アマチュア棋戦の中でも最も歴史と権威のある女流アマ名人戦を2007・2008年と連覇した。2連覇を達成するのは史上6人目の快挙である。その実力を買われ、第31期女流王将戦、第1回・第2回大和証券杯女流最強戦、第1回・第3回マイナビ女子オープンなどのプロ棋戦にアマチュア代表として出場し、プロ棋士に勝利を挙げてその名を全国に轟かした。将棋を通じて国際交流を図る「アジア国際学生将棋交流企画（AISEP）」には立案時より会計として携わり、責任者を務めて企画を成功に導いた。これら将棋を軸とした多彩な活動、国際的かつ幅広い世代に対する将棋の普及への貢献が高く評価された。

安藤　巌乙（文学部4年）

安藤氏は2008年4月に中国青島を自転車で出発。パミール高原を越え、中央アジアを一路西進。東欧を回り、アルプスを越え、本年3月にモロッコのカサブランカに至るまで、総計2万キロの行程を単独で走行した。食中毒などの困難を乗り越え、現地の政治情勢の変化にも機敏に対応し、稀に見る強靭な意志と体力をもって当初の目的を達成した。さらに旅行中随時更新されたブログは一般からも大きな反響を受けた。途中の便宜のために予めロシア語を修得したり、前年にアイスランド一周の腕試しをするという周到な準備作業も特筆すべきである。この偉業は他の学生の勇気を奮い立たせるものと賞賛され、高く評価された。

【団体】2件

東京大学法科大学院出張教室

出張教室は本学法科大学院の学生が中学・高校に出向き法律の授業(法教育)を行う団体である。法律が身近に感じられた等の生徒からの声を活動の原動力として、法科大学院の勉強と両立させながらも、発足5年でこれまで30を超える学校で計3000人以上の中高生に法教育を行ってきた。その過程で従来未開拓であった中学・高校における法教育の充実に大きな役割を果たした。出張教室の活動は社会に開かれた法曹の養成という法科大学院制度本来の理念にも沿うものであり、本学法科大学院から育つ法曹の多様性、柔軟性を高める貢献が高く評価された。

東京大学海洋調査探検部硫黄鳥島遠征隊

東京大学海洋調査探検部は、創立以来レジャー潜水が普及していない日本・海外各地へ遠征し、潜水技術の研鑽と調査探検活動を続け、定期的なシンポジウムの開催などで、社会にその成果を発信し続けてきた。創立時からの経験・ノウハウに基づき重大な事故がなく、安全管理に関する実績も特筆される。本年8月には創立40周年事業として、活火山の無人島、硫黄鳥島に遠征し、同島の魚種類のデータベース作成と酸性・高温下での造礁サンゴからソフトコーラルへの群集シフトと考えられる事象を発見し、専門家の高い評価を受けた。総長が標榜する「タフ」な東大生の象徴と言え、これらの実績が高く評価された。

NEWS

一般ニュース

一般

地球観測データ統融合連携研究機構（EDITORIA）

EDITORIA 機構長 小池俊雄教授が、中国科学アカデミー（中国科学院）アインシュタイン教授賞を受賞

中国科学院が世界でもっとも卓越した自然科学技術分野の科学者に授与するアインシュタイン教授賞が、当機構の小池俊雄機構長（大学院工学系研究科･工学部 教授）に贈られた。これは、同教授の長年に渡るチベット高原上の水・エネルギー循環、大気陸面相互作用のメカニズム解明の研究に対するすぐれた功績に対して贈られたもので、地球科学の分野では我が国初めての受賞である。

小池機構長は、9 月 13 日（日）から 9 月 19 日（土）まで、中国科学院の招聘により、北京にある中国科学院大気物理研究所、チベット高原研究所、および蘭州にある中国科学院付属の寒冷乾燥地域環境工学研究所の 3 つの機関において、それぞれ受賞記念講演を行った。中国側を代表して、チベット高原研究所所長の Yao Tandong 教授、大気物理研究所の Wu Guoxiong 教授の、両中国科学アカデミー会員（院士）より、歓迎とお祝いの言葉が、小池機構長に対して贈られた。チベット高原研究所の Yang Kun 教授（本学大学院博士課程修了）からは、「たいへん感銘を受けた。本研究所の研究目標についても大きな示唆を得る素晴らしい内容であった。」と称えるコメントが届けられた。

また、このたびの受賞を記念して、チベット高原研究所所長と、本学 EDITORIA 機構長は、科学交流に関する共同研究協定に調印し、今後 1 年以内に 3 カ月間を上限とする期間で、中国側から上級科学者を 1 名ないし 2 名、中国科学アカデミーが渡航費ほか一切の費用を負担するという条件のもとで、本学 EDITORIA 内小池研究室へ招聘することが決められた。

本件に関するお問い合わせは、EDITORIA 事務局までお願いします。
editoria@editoria.u-tokyo.ac.jp
電話：03-5841-6132

Yao Tandong チベット高原研究所所長（中国科学アカデミー会員）より賞を贈られる小池機構長

一般

地球観測データ統融合連携研究機構（EDITORIA）

地球観測によるアフリカ水問題解決の支援を目指して－GEO タスクチーム会合開催－

水へのアクセス、健康、洪水、渇水、気候変動の影響、生物多様性、越境河川問題など、数多くの課題を抱えるアフリカ水問題に対して、国際的な地球観測の協力のもとに、その解決を支援しようという取り組みが、EDITORIA のリーダシップで本格的に始まった。

本年 1 月にチュニスで開催された第 1 回アフリカ水循環シンポジウムの結果を受けて（学内広報 No.1383 参照）、9 月 23 日（水・祝）～ 24 日（木）、地球観測に関する政府間部会（GEO）の事務局が置かれているジュネーブの国連世界気象機関（WMO）本部にて、GEO、NASA、EDITORIA の共催で、第 1 回タスクチーム会議が開催された。

会議では、GEO 事務局長から本タスクチーム会合への強い期待が述べられたのに続き、小池俊雄機構長から会議の背景、目的、方向性の説明と、第 1 回シンポジウムの報告があった。これらを受けて、ユネスコ、世界気象機関、国連アフリカ経済委員会等の国連機関代表、JAXA、NASA、ESA など衛星機関の代表、アフリカ各国の専門家から、進行中のプロジェクト、観測の統合化、データの相互利用、能力開発に関わる発表があった。その後、2 グループでテーマ別議論を経て、小池機構長より国際協力の枠組み原案と、継続議論の方法論の総括があり、平成 22 年の第 2 回シンポジウムへ向けたロードマップを採択して、2 日間の密度の高い議論を閉じた。

本件に関するお問い合わせは、EDITORIA 事務局までお願いします。
editoria@editoria.u-tokyo.ac.jp

電話：03-5841-6132

GEO アフリカ水循環に関する第１回タスクチーム参加者

一般

本部キャリアサポートグループ

博士課程学生・ポスドク対象企業説明会開催

10 月１日（木）16 時から浅野キャンパス武田先端知ビルを会場として、キャリアサポート室主催の博士課程学生・ポスドク対象企業説明会が開催された。

2005 年に開設されて以来、キャリアサポート室では、学部学生、大学院学生を主たる対象として卒業生との交流の場の提供、業界・企業について研究する場の提供、キャリアアドバイザーによるキャリア相談などのサービスを行ってきた。一昨年より、これらのうち業界・企業研究とキャリア相談とをポスドクにも本格的に門戸を開いていくための第一歩として、この説明会を開いたもので、今回が第３回目である。

同ビル５階の武田ホールに出展 13 社の個別テーブルを設置、参加者はそれぞれのテーブルで企業の人事担当者や技術部門担当者らと懇談する形式で、学生、ポストドクターの約 200 人が来場した。予定の４時間ぎりぎりまで懇談の続くテーブルがいくつか見られ、盛り上がりをみせた開催であった。

一般

海洋アライアンス

小学校にて出前授業開催

海洋アライアンスは 10 月３日（土）、中野区立多田小学校において出前授業を行った。今回の出前授業はＰＴＡ主催の行事のメインイベントとして実施され、クラス単位とは異なる１年生から６年生までの混成授業であった。午前と午後の授業をあわせておよそ 150 名と、休日にもかかわらず、多くの児童と保護者が参加した。

今回のテーマは「海の生き物あれこれ」というテーマで、クイズやゲームなどを取り入れながら、海の生き物を紹介する趣向である。講師を担当したのは海洋アライアンスの福島朋彦特任准教授で、野村英明研究員と長田朱美氏が授業を補助した。授業は海に関する簡単な実験と、地球上にはいろいろな海があるという話から始まった。

デカルトの潜水夫の実験に嵩じる子ども達

クイズ大会では、「地球上でもっとも長い生き物は？」「シロナガスクジラの血管の太さは？」等、日頃、水族館ではみられない生き物の問題が出題され、１年生から６年生まで積極的に手が挙がった。

続くゲーム大会は、チーム対抗で行われ、大いに盛り上がった。ゲームの内容は、５～６個のヒントから生き物を推測し、たくさんある生き物カードの中から選ぶ、というものである。よく知っているはずのホタテが実は泳ぐことや目があること、蒲焼きはウナギの持つ毒を解毒する理にかなった食べ方であることなどを聞いて、意外な答えを知った児童達はどよめき、とても驚いている様子であった。

魚介類のカードを真剣に選ぶ

最後の質問コーナーでは、多くの質問が挙がり、海への関心の高さが窺えた。また、参加した児童からは、「クイズやゲームがおもしろかった」「海や魚のことがいろいろわかった」「知らなかったことがわかった」などの感想が寄せられ、大好評であった。

ＰＴＡからは、「異なる学年の子どもが、チームで話し合い考えながらカードを選ぶ姿が印象的で、やれば出来ることがわかった」との感想をいただいた。

今回の授業では、ＰＴＡや先生にも参加いただき、授業をサポートしていただいた。おかげで多くの人数の子ども達が最後まであきないで、授業に集中できる環境を作ることができた。ここに感謝の意を表します。

海洋アライアンスでは、海洋生物から海洋資源まで、多岐にわたる出前授業を用意して、海にも山にも出かけます。詳しくは海洋アライアンスホームページをご覧ください。

海洋アライアンスホームページ：
http://www.oa.u-tokyo.ac.jp

一般

本部研究推進グループ

平成 21 年度「東京大学穂門賞」授賞式が挙行される

平成 21 年度「東京大学穂門賞」の受賞者が、伊藤雅俊様、伸子様、株式会社アドバンテスト代表取締役兼執行役員社長松野晴夫様、大日本印刷株式会社代表取締役社長北島義俊様及び森ビル株式会社代表取締役社長森稔様の 4 件に決定し、授賞式が 10 月 6 日（火）17 時 30 分から山上会館において挙行された。本表彰は、私財の寄附、ボランティア活動及び援助等により、本学の活動の発展に大きく貢献した個人、法人又は団体（現に在籍する本学の教職員及び学生は原則として対象外）に対し授与するもので、平成 14 年度より毎年度行うこととしている。授賞式においては、選考結果の報告、各受賞代表者への表彰状及び記念品の贈呈があり、その後、総長の挨拶、受賞者からの挨拶が行われた。また、授賞式に引き続き、レセプションが行われ、受賞者及び受賞関係者と本学関係者との懇談が和やかな雰囲気の中で行われた。 受賞者の授賞理由は以下のとおりである。

◎　受賞者

1　伊藤雅俊様、伸子様

受賞理由：社会と大学との関わりを深めるための社会連携拠点となる「伊藤国際学術研究センター（仮称）」の建設には両氏の多大な寄附が大きく寄与しており、その功績が評価された。

伊藤雅俊様、伸子様及び推薦部局関係者、総長の記念撮影

2　株式会社アドバンテスト代表取締役兼執行役員社長
　松野晴夫様

受賞理由：株式会社アドバンテストが大規模集積システム設計教育研究センターに対して行ってきた大型装置（ＥＢ露光装置、ＳｏＣテストシステム）の寄附（平成 17 年度）、寄付研究部門の設置（平成 19 年度）という一連の継続的な支援による研究活動の発展や成果が評価された。

株式会社アドバンテスト代表取締役兼執行役員社長
松野晴夫様及び推薦部局関係者、総長の記念撮影

3　大日本印刷株式会社代表取締役社長　北島義俊様

受賞理由：大日本印刷株式会社の支援により、史料編纂所の研究・書庫棟の耐震工事が完了するまでの間、同所で所蔵している貴重な史料やマイクロフィルム等を適切な空間・温湿度管理の下、１年以上に渡り保管場所の確保や一時保管中の史料の貸出し、閲覧の便宜が図られる等の協力をいただいたことにより、本学が世界に誇る貴重な史料等の損失の未然防止及び利用者の利便性の確保が図られたことが評価された。

大日本印刷株式会社代表取締役社長 北島義俊様及び
推薦部局関係者、総長の記念撮影

4　森ビル株式会社代表取締役社長　森稔様

受賞理由：知に感動する教育環境、知と向き合う学習環境、知を磨きあう実践環境を備えた「駒場キャンパス－

理想の教育棟」の建設には同社の多大な寄附が大きく寄与しており、その功績が評価された。

森ビル株式会社代表取締役社長 森稔様及び
推薦部局関係者、総長の記念撮影

一般

サステイナビリティ学連携研究機構
環境省 S-5 ／ IR3S 共催一般公開シンポジウム開催

10 月 15 日（木）、安田講堂において、環境省 S-5 ／ IR3S 共催一般公開シンポジウム「実感！地球温暖化～地球温暖化予測をあなたはどう役立てますか～」が開催された。

今回のシンポジウムの第一部では、サステイナビリティ学連携研究機構（IR3S）住明正教授のビデオメッセージにはじまり、日頃より温暖化問題に携わる研究者の方に、気候モデルや温暖化予測の信頼度や温暖化影響の解析、社会とのコミュニケーションなど、それぞれの研究分野から地球温暖化予測に関する最新の科学的知見をお話いただいた。

第二部のパネルディスカッションでは、マスコミ・官庁・企業からパネリストを招き、第一部の講演者とともに温暖化問題について議論が行われた。マスコミからは研究者へ継続的な最新情報の発信を求める声が、官からは温暖化を「緩和する」だけでなく「適応する」ことの重要性についての発言があった。また、企業からは「ピンチはまた同時にチャンス」という企業なりの温暖化対策が提言された。一口に温暖化問題といっても、立場によってその捉え方、取り組み方は様々であり、今後は多様な立場にいる人が協力して、温暖化問題に取り組んでいく必要性を実感する議論となった。またディスカッションの最後には質疑応答が行われ、講演や議論を受けて、会場の参加者から、地球温暖化問題における初等･中等教育の重要性を指摘する発言もみられた。

当日は学内外より 500 名以上の参加があり、地球温暖化問題への関心の高さを窺うことができた。なお、当日に IR3S/TIGS 叢書「地球温暖化懐疑論批判」を配布したところ、好評であった。

なお、当日のプログラムは下記を参照ください。

■プロジェクトリーダーからのビデオメッセージ
住明正（東京大学サステイナビリティ学連携研究機構）
■第一部　講演
・はじめに～地球温暖化の予測とは
江守正多（国立環境研究所地球環境研究センター）
・予測の前提となる社会経済シナリオ
山形与志樹（国立環境研究所地球環境研究センター）
・気候モデルの性能と予測～身近な気象はどうなる
高薮縁（東京大学気候システム研究センター）
・日本の気候はどこまで詳しく予測できるか
高薮出（気象研究所環境・応用気象研究部）
・温暖化は怖い？～影響をどうとらえるか
江守正多（国立環境研究所地球環境研究センター）
・温暖化予測は人々にどう伝わっているか
松本安生（神奈川大学人間科学部人間科学科）
■第二部　パネルディスカッション
～利用者の視点と研究者の視点～
コーディネーター：江守正多
パネリスト：
・第一部講演者
・根本美緒（フリーキャスター／気象予報士）
・西川美和子（ＮＨＫ「SAVE THE FUTURE プロジェクト」専任ディレクター）
・中川修（大成建設株式会社社長室経営企画部部長）
・小野洋（環境省地球環境局研究調査室室長）

サステイナビリティ学連携研究機構の最新のイベント・活動情報についてはホームページをご覧ください。
http://www.ir3s.u-tokyo.ac.jp/

第一部講演の様子

第二部パネルディスカッションの様子

一般

本部キャリアサポートグループ

平成 21 年度学務研修会実務勉強会を開催

10 月 16 日（金）、平成 21 年度学務研修会実務勉強会が薬学系総合研究棟大会議室において開催された。

本部をはじめ、部局や各専攻などで学務に携わる担当者や、学務業務に興味のある者など計 22 名が参加した。この実務勉強会は、本学の教育･学生支援系業務のあり方や求められる職員像について考える機会とするとともに、業務の円滑な処理に必要な基礎知識を修得させ、学生支援体制の充実と業務能率の向上に資することを目的として、教育･学生支援系が中心となって毎年行っているものである。

始めに、教育･学生支援系の矢野由美統括長による業務紹介、キャリアサポート室青山小百合特任専門職員による講義「キャリアアドバイザーとは」、午後からはキャリアサポート及びなんでも相談の事例演習に引き続き、学生相談所倉光修教授による相談学生に対する対応の仕方等について、参加者が粘土を使った創作作品を基に講義・演習を行った。

講義のほか、グループに分かれての演習では活発なディスカッションが行われ、受講者は課題に熱心に取り組んだ。この実務勉強会は、普段はあまり接することのない他部局の人たちとの人脈を拡げるよい機会にもなったのではないだろうか。

受講生との記念撮影

一般

海洋アライアンス

「平塚総合海洋実験場」についての記者会見が行われる

海洋アライアンスは 10 月 20 日（火）、平塚総合海洋実験場についての記者会見を行った。平塚総合海洋実験場は、2009 年 7 月 1 日に東京大学が独立行政法人防災科学研究所から取得したもので、平塚海岸沖合 1 km、水深 20m に立つ沖合プラットフォーム「平塚沖総合実験タワー」とデータ処理装置を完備した陸上施設で構成されている。この施設は、継続的な海洋観測、海洋機器開発、さらにはアウトリーチ活動など、多様な運用が期待されている。

記者会見では、冒頭に海洋アライアンス機構長の浦環教授が趣旨説明を行い、それに続いて平塚沖総合実験タワーのタワーオフィサーを務める林昌奎教授が、概要と今後の抱負を語った。林教授は、「海洋情報の継続的な発信は限られた研究分野だけでなく、防災、漁業及びレジャーなど多様な利用形態がある」ということを強調した。また、同タワーに設置した波浪観測レーダーが台風 10 号接近の際に、今まで不可能だった 11.6m の波の計測に成功したことが明らかにされた。

左から林教授、浦機構長、浦辺徹郎教授

最後に浦機構長は「これから多くの研究成果が期待できるが、同時にこの施設が大切だということを、一般の人にも認識してもらいたい」と述べ、記者発表は終了した。

海洋アライアンス：
http://www.oa.u-tokyo.ac.jp

一般

学生相談ネットワーク本部

教職員のための「学生のメンタルケア」講習会を開催

学生相談ネットワーク本部主催、平成21年度第4回教職員のための「学生のメンタルケア」講習会が10月22日（木）に白金キャンパス医科学研究所1号館において、第5回講習会が10月28日（水）に本郷キャンパス理学部1号館小柴ホールにおいて、それぞれ開催された。

講習会では、学生相談ネットワーク本部精神保健支援室による「メンタルヘルス講義」、亀口憲治企画室長及び学生相談所による「学生対応の演習」が行なわれた。精神科医、臨床心理士など専門家による講義を通して、学生が抱える諸問題についての理解が深まり、質問も数多く出された。グループディスカッション形式の演習では、様々な部局からの参加者が活発な意見交換を行なうことができた。

参加者は、第4回が37名（4部局、教員13名、職員24名）、第5回が26名（8部局、教員10名、職員16名）であった。

本講習会は、平成20年4月に発足した学生相談ネットワーク本部の活動の一環として、平成20年度は本郷・駒場・柏の3キャンパスで開催され好評を得た。平成21年度は、「他のキャンパスでも開催して欲しい」「回数を増やして欲しい」とのアンケート要望が多かったため、白金キャンパスでの開催を追加、本郷キャンパスでの開催を2回に増やし、計5回開催された。本年度は第5回をもって最終となる。

第4回・学生相談所の教員らによる、
紙粘土を使用した「学生対応の演習」

第5回・精神保健支援室 佐々木司教授による
「メンタルヘルス講義」

一般

本部奨学厚生グループ

学寮・国際学生宿舎で消防訓練を実施

10月25日（日）、本部奨学厚生グループ所管の学寮・国際学生宿舎において、消防訓練を実施した。

15時から、豊島学寮及び豊島国際学生宿舎において、豊島消防署巣鴨出張所職員の指導のもと、消防訓練が行われた。まず、豊島学寮南寮4階のキッチンにて出火した想定で、避難訓練が行われた。寮委員が寮内放送で避難を呼びかけると共に、隣接する豊島国際学生宿舎へ火災発生を連絡し、的確に避難誘導を行った。

続いて、豊島国際学生宿舎中庭にて、水入り消火器を用いた消火訓練を行った。その他、自動火災報知設備及び屋内消火栓の操作説明や、心肺蘇生法及びＡＥＤの演習訓練等を行った。参加した豊島学寮、豊島国際学生宿舎併せて90名の寮生は、説明に対し活発に質問するなど、消防署員の話に真剣に聞き入っていた。

肌寒い曇り空の中行われた訓練だったが、寮生にとって防災意識を高める有意義な訓練となった。

また、18時から豊島国際学生宿舎の中庭において、豊島学寮・豊島国際学生宿舎合同で「寮祭」が行われた。この寮祭は、毎年宿舎生、寮生及び近隣の方々とコミュニケーションを図ることを目的として開催しており、学寮の調理師による料理の他に、焼肉やお菓子、おでん等、寮生・宿舎生の手作り料理も用意され、皆美味しそうに、ほお張っていた。

日頃からお世話になっている近隣の方々など、多くの方の参加があり、交流を深める良い機会となった。

心肺蘇生法及びＡＥＤ演習訓練（豊島国際学生宿舎）

寮祭で行われたビンゴ大会（豊島国際学生宿舎）

特集の記事を執筆してみませんか？

学内広報では巻頭特集の記事テーマとその執筆部署を募集しています。皆さんの部署でも、ぜひ特集の記事を執筆してみませんか？

1．制作方法

①　テーマの選定
全学の教職員を読者対象とするテーマを選定。まずは、本部広報グループに気軽にご相談ください。

②　内容・構成の決定
執筆部署と学内広報編集スタッフ（以下、編集スタッフ）の打ち合わせでページ内容を決定します。

③　原稿の執筆
決定した構成に合わせて執筆部署に原稿を書いていただきます。字数等は編集スタッフが提示します。

④　ビジュアル要素の提供
写真・図・イラストを提供していただきます。

⑤　デザイン
執筆部署または編集スタッフがページデザインを作ります。

⑥　校正
文字校正を行なっていただきます。

⑦　完成
刷り上った学内広報は執筆部署に多めに配布します。

2．締切日
期日を申しますので、ご協力をお願いします。

3．問い合わせ先・原稿提出先
本部広報グループ　広報企画チーム
TEL：03-3811-3393　内線22031
E－mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

一般

本部総務グループ

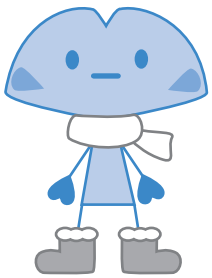
名誉教授懇談会の開催

10 月 27 日（火）18 時から山上会館において名誉教授懇談会を開催した。

名誉教授の方々 157 人が御出席され、学内からは濱田純一総長をはじめ理事（副学長）、各部局長等の関係者多数が出席した。

懇談会は、濱田総長の挨拶の後、小宮山宏名誉教授（前総長）の発声で乾杯があり懇談が開始された。途中、平成 21 年度の名誉教授称号授与者を代表して医学系研究科の廣川信隆名誉教授の挨拶があり、終始なごやかな雰囲気で続けられ、前田正史理事（副学長）の閉会挨拶をもって散会した。

写真上：挨拶をする濱田総長（左）、乾杯の挨拶をする小宮山名誉教授（前総長）（右）、写真下：名誉教授称号授与者の代表挨拶をする廣川名誉教授（左）、なごやかな歓談の様子（右）



部局ニュース

部局

大学院理学系研究科・理学部

大学院理学系研究科・理学部留学生見学旅行を実施

９月５日（土）から７日（月）にかけて大学院理学系研究科・理学部留学生見学旅行が行われた。本研究科・学部には 57 名の外国人留学生が在籍しているが、今年は２泊３日で飛騨高山とスーパーカミオカンデの見学を企画し留学生と国際交流室のスタッフの計 17 名が参加した。

１日目は 11 時前に東京駅発の東海道新幹線に乗り名古屋経由で高山へ。民宿到着後は各自自由に過ごし、飛騨牛や刺身などの美味しい夕食の後は毎年恒例のレクリエーションを行った。ゲームで勝ったチームから順に可愛い手提げカバンや T シャツの景品を選び記念撮影。参加者同士の交流も深まり、学内外からの寄附によるこれらの景品は早速旅行中に学生達に使われ、大活躍であった。

２日目の午前は地元のシルバーボランティアの方に和・英２カ国語で高山市内の名所を案内して頂いた。飛騨国分寺から出発して地元の野菜や漬け物、お土産を売っている宮川朝市、昔の歴史ある木造家屋である吉島家住宅、日本３大祭りの１つである高山祭りで使う美しい屋台（山車）を保存している高山祭屋台会館を見学し、手焼きせんべいを焼く体験や市内の古い町並みを歩くなどして楽しんだ。昼食後は飛騨の里で手染めの体験教室に参加した。各自が自分の好きな模様を絞り、ブックカバーやハンカチを環境に優しい染料を使用したエコ染めで染め上げた。

３日目は今回の旅行のハイライトであるスーパーカミオカンデを見学した。朝、列車で高山から猪谷に移動し、バスを乗り継いで神岡鉱山入口へ到着。入口からバスで坑道の中を５、６分ゆっくり進んだ先に神岡宇宙素粒子研究施設はあった。研究施設の中ではスーパーカミオカンデについてのビデオを見た後、海外からのポスドク研究員の方に英語で詳しく実験内容も含めて説明して頂き、留学生達の質問にも１つ１つ丁寧に答えて頂いた。また、カミオカンデの上にも実際に立ちその規模の大きさを実感することが出来た。

今回は初の２泊３日の見学旅行であったが、日本の歴史と文化を体感し、また、スーパーカミオカンデを見学することが出来た。留学生にとって大変充実した旅となったようである。

高山市内の見学

いざ、スーパーカミオカンデへ！

部局

大学院教育学研究科・教育学部

多賀先生の特別授業が教育学部附属中等教育学校で行われる

９月 30 日（水）に、教育学部附属中等教育学校において教育学研究科身体教育学コースの多賀厳太郎教授の授業「発達する脳と身体」が行われた。

脳は思考・言語の他にもスポーツ・芸術・睡眠や心にも関与しているという話から始まり、生徒にとって興味深い情報をたくさんいただいた。その中でも解剖学的説明を行うために、実物大の脳の模型から脳各部を生徒に取り出させた場面では会場が沸き、またその模型の大脳部を参加者に回した時には、手に取った生徒から感歎の声があがった。

さらに、多賀先生の研究室での実験の紹介で、『かなり小さな赤ちゃんでも音の変化・抑揚に反応し、その後の音への慣れも生じている』という事実や、『赤ちゃんは踊る、赤ちゃんは自分の意志で玩具を動かす』、『寝返りが打てない赤ちゃんも支えれば歩ける』という実験結果の映像には、皆がとても驚いていた。質問形式で考えさせた後、予想を覆す結果を話されていたので次第に生徒たちは授業に引き込まれていった。

授業後の質問では終了時間を過ぎても後から後から手

が上がり、生徒たちの知的好奇心が大きく刺激された様子であった。個別質問でも長蛇の列ができていた。

講義の様子

部局

医学部附属病院

医学部附属病院で災害対応の一斉防災訓練が実施される

10月1日（木）13時30分から、「附属病院災害対応の一斉防災訓練」が入院棟A・B、中央診療棟Ⅰ・Ⅱ等において約400名の教職員と約100名の医学部学生の参加により行われた。

傷病者役の医学部の学生たちには特殊メイクが施され、治療を受ける側で実体験をしてもらい、将来治療する側に立ったときに役立ててもらえるようにした。今回の訓練計画は、昨年までの取り組みを基本ベースに、環境安全本部や生産技術研究所都市基盤安全工学センターとの共同研究の成果を取り込んで立案された。想定として、東京に大規模直下型地震が発生、医学部附属病院に多数の傷病者が運ばれるという内容で実施された。地震発生後直ちに、災害対策本部が入院棟A地下1階事務室に設置され、初期消火、患者の避難誘導、各病棟の被害状況確認、ライフラインチェック、トリアージ等を実施し、全学環境安全本部との相互連絡を行った。また、新たな取り組みとして、携帯電話による安否確認・登院訓練を行った。

災害拠点病院に指定されている医学部附属病院は、地域の医療救護活動の重要な拠点となることが期待されている。そのため、電気、通信、上下水道等のライフラインに大きな被害が生じた場合であっても、限られた医療機能を最大限に利用して、負傷者への医療救護活動を行うことが強く求められている。

医学部附属病院では、今回の防災訓練の反省・提案事項を参考に、一層の防災意識の高揚を図ることとしている。

トリアージ訓練の様子

傷病者の搬送、治療訓練の様子

部局

大学院農学生命科学研究科・農学部

教職員対象イベント「富士演習林のきのこ」開催される

本学教職員向け特別ガイド「富士演習林のきのこ」が、10月3日（土）、大学院農学生命科学研究科附属演習林・富士演習林（山梨県山中湖村）で開催された。きのこに関する専門的なアドバイスを提供することで、森への親しみを共有してもらうのが目的である。また、この企画は、富士演習林と山中寮内藤セミナーハウスとの共催で行われた。今年7月末に開寮したばかりの内藤セミナーハウスを教職員の方々にお披露目する目的も兼ねての企画である。

当初、20名を定員としていたが、広報した直後に定員を超える申し込みが相次いだため、急きょ定員を2倍にして、開催することにした。申し込みをいただきながら、ご希望に沿うことができなかった方々にはお詫び申し上げたい。

当日は、あいにくの雨天であったが、43人（うち子ども3人）の本学教職員およびその家族・友人が、山中

寮内藤セミナーハウスに集まった。

午前中は、富士演習林の代表的な食用きのこにターゲットを絞って、解説、きのこ採集が行われた。今年はきのこの発生が不調であるものの、これだけの人数できのこを探せば結構集まるもので、昼食のきのこ鍋には十分な量の食用きのこが採れた。

昼食のきのこ鍋には、参加者の皆さんが採集した４種のきのこが入れられた。また、晩酌しない人限定ということで、酒と一緒に食べると悪酔いするホテイシメジを七輪で焼いて食べてもらった。

午後は、４つの班に分かれて、林内で自由にきのこを採集した。色の鮮やかなきのこには歓声が上がった。最後に各班で採れたきのこを集めて同定し、まとめの解説をしようとしたところ、大雨に打たれ、やむなく解散となった。参加者のうち 16 人の方は、内藤セミナーハウスに宿泊した。

後日、複数の参加者の皆さんからお礼のメールやお便りをいただいた。不手際も多く悪天候にも見舞われたものの、良いリフレッシュの機会となったようで、なによりであった。暖かいお礼の言葉を寄せてくださった方々には、この場を借りて感謝申し上げたい。

カラマツ林を代表する食用きのこ・ハナイグチ

ゆうに 100 人分はあった天然きのこ入りの「きのこ鍋」

内藤セミナーハウス中庭で採集物を整理、同定した

部局

医科学研究所

「慰霊祭」行われる

医科学研究所では、同附属病院で亡くなられ、病理解剖させていただいた方々の御霊をお慰めするために、10月８日（木）13 時 30 分から医科学研究所慰霊祭を挙行した。式は、参列者全員による黙祷に始まり、献体者御尊名の奉読の後、清木元治所長が「御霊に捧げることば」を述べた。続いて、御遺族及び医科学研究所関係教職員が献花を行い、最後に、山下直秀病院長から御遺族に対して感謝のことばがあり、14 時過ぎに滞りなく終了した。

「御霊に捧げることば」を述べる清木所長

遺族への感謝のことばを述べる山下病院長

部局

大学院総合文化研究科・教養学部

教養学部 60 周年記念企画「東大駒場薪能」開催される

今年は本学教養学部が発足してから 60 周年という節目の年にあたることから、教養学部では、これまでに特別展「矢内原忠雄と教養学部」や関係シンポジウム等の記念行事を企画してきた。

この度、10 月 10 日（土）から駒場博物館において、世阿弥直筆本をはじめ、現代に至る歴代観世宗家に関わる資料を一挙に展示する特別展「観世家のアーカイブ－世阿弥直筆本と能楽テクストの世界－」が開催されることとなり、10 月 9 日（金）に特別展の内覧会及びオープニング行事として、薪能公演「東大駒場薪能」が駒場Ⅰキャンパスの駒場コミュニケーションプラザ中庭において開催された。

18 時開演の薪能は、山影進教養学部長の挨拶で始まり、松岡心平教授の解説の後、山影学部長と松岡教授による篝火の火入れ式が行われ、公演が開始された。

最初に野村萬斎氏による狂言「萩大名」が行われた後、二十六世観世宗家の観世清和氏による能「紅葉狩」が行われた。普段は学生の憩いの場である中庭に設置された舞台上で、夕闇に浮かび上がる木々を背景に篝火が焚かれるなか、幽玄の世界が繰り広げられ観客を魅了した。

薪能には、佐藤愼一理事（副学長）、小島憲道理事（副学長）、山田一郎副学長、各研究科長、研究所長が参加し、観客の数は、本学の学生、教職員の他、公募に当選された一般の方等を合わせて 1300 人に上った。

また、公演終了後には、駒場ファカルティハウスにおいて、記念レセプションが開催された。観世氏や野村氏他の演者にも参加いただき、和やかな歓談が行われた。

狂言「萩大名」野村萬斎氏

能「紅葉狩」観世清和氏

部局

大学院総合文化研究科・教養学部

三鷹国際学生宿舎にて留学生歓迎会行われる

10 月 11 日（日）、10 月より新しく入居した留学生 41 名と宿舎生との交流を促進するため、三鷹国際学生宿舎の共用棟にて留学生歓迎会を行った。この会は、院生会（留学生をサポートするための大学院生の組織）及び宿舎生会（宿舎の全学生を構成員とする組織）の企画により、毎年行われているものである。

当日は 18 時に開会し、大学院生、学部学生、留学生及び三鷹宿舎生ＯＢの参加も得て、延べおよそ 170 人が参加した。

会場となった宿舎共用棟ホールでは、クイズやビンゴが行われ、終始楽しい雰囲気で時間が過ぎていった。また、宿舎生が用意した寿司、デザートなども振る舞われ、参加者はみんな舌鼓を打っていた。特に寿司は好評で、どのテーブルでもすべてすぐに無くなるほどであった。会の終盤には、共用棟内にあるスピーカーで音楽を流し、留学生は思い思いにダンスをするなどして楽しんでいた。歓迎会は 21 時過ぎに盛会の裡に終了した。

今後も留学生が日本の文化に触れられ、同時に日本人学生も留学生から多くを学べる、文化的な視野を広げていけるような企画を継続して行なっていきたいと思っている。

共用棟ホールの様子

部局

大学院教育学研究科・教育学部

留学生修学旅行で日光を堪能する

10月14日（水）・15日（木）の両日、大学院教育学研究科・教育学部では、恒例の秋の留学生修学旅行を実施した。7年ぶりの宿泊を伴う旅行で、参加者は留学生22名、武藤芳照研究科長をはじめとする引率の教職員7名の計29名であった。

時折、陽が差す曇り空の下、当初の予定通りに8時に貸切バスで本郷キャンパスを出発し、首都高から東北道を抜け、最初の目的地である華厳の滝へと向かった。車中ではいろは坂の急カーブに揺られながら、窓からのぞく紅く色づき始めた木々の美しさに嘆声をあげ、華厳の滝では、その華麗で雄大な自然の造形美に思わず息を飲んだ。中禅寺湖畔で鍋定食の昼食をとった後、全員が湖に出て、その水面の神秘的な色合いとさわやかな風とを満喫した。

午後にはまず、理学系研究科附属植物園日光分園で自由散策を楽しんだ。普段、東京では見ることのできない様々な草木を愛で、清澄な空気を胸一杯に吸い込むことで、多くの留学生が大いに心身をリフレッシュさせることができたようである。その後、いよいよ、世界文化遺産の日光の社寺へと赴き、それぞれが思い思いに、東照宮をはじめ、二荒山神社や輪王寺などを巡り、日本の文化と歴史の一端にふれた。事前にいろいろと予習をしてきた留学生も多かったようで、いわゆる三猿や眠り猫などについては、教職員の方が留学生から説明を受けるような場面もあった。時折、ゴロゴロと雷鳴が聞こえてくるようなこともあったが、最後まで雨には見舞われず傘を差さずに社寺全域を回ることができたことはとても幸いであった。

宿泊は鬼怒川温泉のほてる白河 湯の蔵で、17時過ぎに到着後、18時より、全員が顔をそろえての夕の宴となった。美味なる日本料理の数々に舌鼓を打つ一方で、楽しく語り、また歌い、和やかな雰囲気の中、参加者相互の親睦を大いに深めることができた。また、日本の伝統的な旅館のたたずまいと眼下に渓谷をのぞむ開放的な露天風呂は、多くの留学生にとってとても感動的であったようである。

２日目は、目の覚めるような美しい秋晴れの中、9時15分に宿を出発し、10時より、それぞれが小物掛、手鏡、写真立の素材の中からいずれか1つを選んで、日光彫を体験した。最初、その独特の刃使いに少なからず戸惑うこともあったようだが、途中からは、一人ひとりが彫刻家さながらに、こだわりの作品づくりに没頭し、最後は互いに見せ合うくらいに、その出来映えの妙に満足したようであった。

その後、昼過ぎに今回の旅行の最終目的地となる日光江戸村へと移動し、昼食を済ませた後、16時までの自由行動となった。かなり忠実に江戸の風情を再現したその町並みや様々な劇場や展示館等での催しは、留学生の心に、現代とはまた違う、日本という国の文化のおもしろさと奥深さを強く印象づけたようである。留学生4名ほどが衣装体験で、武士や姫・武家娘などの姿に扮したが、そのあまりの似合いようは、一般の旅行客までもが次々とカメラを向けるほどのものであった。

帰路の車中は2日間の疲れのせいか思いの外、静かであったが、予定より少し遅く19時頃に本郷に到着し、参加した留学生に、日本の自然と歴史・文化に関する数多くの思い出を残しながら、無事解散となった。出身国の異なる留学生が、今回初めて言葉を交わし、友達になるというケースも多々あったようであり、そうした意味でも、大変有意義な留学生修学旅行であったと言える。

華厳の滝を背景にして

日光彫に夢中になる留学生

日光江戸村にて江戸装束を身にまとう留学生

部局

分子細胞生物学研究所

動物慰霊祭が行われる

第 12 回「東京大学分子細胞生物学研究所実験動物慰霊祭」は 10 月 20 日（火）10 時より、大学院農学生命科学研究科附属動物医療センター奥の動物慰霊碑前において執り行われた。当日は秋色深まる空の下、昨年より 20 名多い約 100 名の参列者があり、秋山徹分生研所長の挨拶、武山健一動物実験委員長から一年間の動物実験概要の報告に続いて、教職員・学生等参列者による黙祷および焼香がしめやかに行われた。

分生研では研究所本館地下の SPF マウス実験施設及びウサギ飼育室、本館玄関前の新動物舎、そして生命科学総合研究棟地下の実験動物施設を利用して、多くの教職員・学生等に動物実験の場を提供している。目的は主として遺伝子改変マウスの作製及びその解析、神経系や造血系の初代培養細胞の分離とその分子機能解析、骨格筋や骨、脂質代謝・腫瘍制御における分子機構解析、またこれらに拘わるタンパク質の精製、抗体の作製などである。その数は過去 1 年間にマウス約 14000 匹、ラット 2 匹、ウサギ 8 羽に上った。昨年に比べ、約 1000 匹のマウス数が減少したことになる。これらの動物実験で得られた新しい知見は学会や学術論文に発表され、それぞれの専門分野において高く評価されている。近年、生命科学研究の技術革新に伴い、学術論文の質や要求性が高まりつつあるが、分子機能をより明確に提唱する上では、生体内における機能解析は必須である。したがって、今後ますます動物実験は盛んに行われるようになるものと予想される。

一方で、「動物の愛護及び管理に関する法律」（平成 17 年改正）、「研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針」（平成 18 年）を遵守し、特に動物実験等に関する基本理念である 3 R（Replacement, Reduction, Refinement）を尊重して頂きたい。3 R とは Replacement：できる限り動物を利用する方法に代わり得るものを利用すること、Reduction：できる限りその利用に供される動物の数を少なくすること、Refinement：できる限り動物に苦痛を与えない方法によってしなければならないこと、である。これらを念頭において、研究目的・意義が明確で、かつ科学的手法により再現性・普遍性のある結果を導くために、必要最小限の動物を用いて、最大限の研究成果とその質の向上が得られるよう、一層の努力をお願いしたい。

末筆となりましたが、分生研の研究活動のために尊い命を捧げてくれた動物たちの御霊に、感謝と追悼の意をここに表します。

焼香する参列者

部局

生産技術研究所

「第５回駒場キャンパス技術発表会」開催される

生産技術研究所と大学院総合文化研究科・教養学部との共催で、第５回駒場キャンパス技術発表会が 10 月 21 日（水）、生産技術研究所総合研究実験棟（An 棟）2 階コンベンションホールにおいて開催され、技術発表について質疑・討論が盛んに行われた。

技術発表会は通常の学会等とは異なり、同一の専門知識を持ち合わせない技術職員が集まっており、その内容をわかりやすく表現することがなかなか難しいが、発表者は皆、聴講者に理解しやすい話し方で説明することを心がけていた。実に心遣いのある発表会であった。

特別講演は独立行政法人産業技術総合研究所・計量標準総合センター 山田善郎主任研究員の「古典的技術分野におけるフロンティア―高温標準の研究―」についての講演があった。従来、温度定点が存在しなかった温度領域に定点が実現されるまでの過程について講演された。

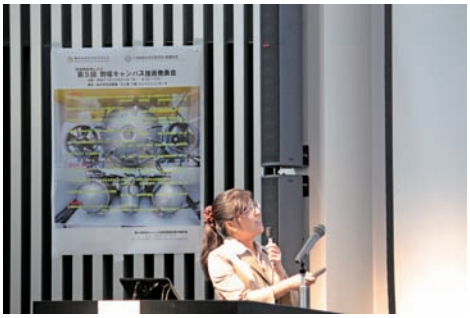
また、今回はポスター発表と共通施設の紹介パネル展示を行っている。パネル展示、展示物を熱心に見学していた方、写真等を撮られていた方々もおり、技術職員の紹介に一役買っていた。

懇親会は教職員、大学院生、留学生、外部からの参加者もあり、多くの方が参加され、有意義な交流ができた。

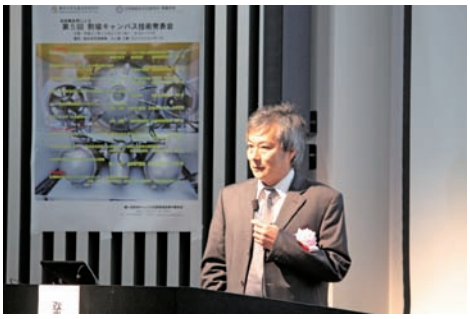
また高羽禎雄・藤井陽一両東大名誉教授（生研 3 部）

による琴とフルートの演奏（宮城道雄“春の海”）、道下朋子･洋夫夫妻によるフルートとピアノの演奏（マスネー“「タイス」の瞑想曲”）が懇親会に華を添えた。

今年も企画段階から開催に至るまで、多くの技術職員のご協力をいただき、また事務職員のサポートに対して心から感謝申し上げる。

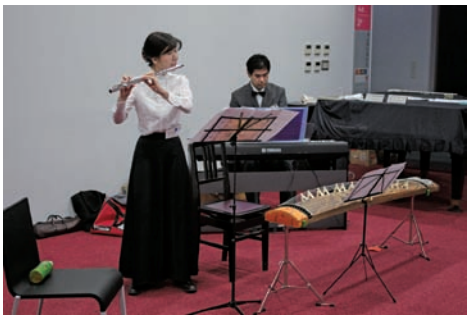


講演中の鎌田久美子技術職員



特別講演の山田善郎主任研究員

春の海を演奏される高羽名誉教授（琴）、藤井名誉教授（フルート）



「タイス」の瞑想曲を演奏される道下夫妻

演奏を聞き入る参加者

部局

東洋文化研究所

第９回東京大学東洋文化研究所公開講座が開催される

10 月 24 日（土）に、経済学研究科棟第一教室にて、第９回東京大学東洋文化研究所公開講座が開催された。本講座は、東洋文化研究所が長年蓄えてきた知的ストックをもとにして、研究所スタッフがわかりやすく解説する、アジアを知るための公開講座で、2001 年から年１回開催し、今年で９回目である。今回は『アジアの習』として、松田訓典助教による「インド大乗仏教における行為と心―瑜伽行派の思想から― 」、橋本秀美准教授による「中国の社会習慣と ≪論語≫ 」、関本照夫教授による「日常知の覚え方―ジャワの更紗作りから」の講演が行われ、300 名にも及ぶ大勢の市民の出席を得、活発な質問・意見が寄せられた。

公開講座の様子

部局

大学院農学生命科学研究科・農学部

附属農場、自衛消防訓練を実施

10 月 27 日（火）13 時から約１時間にわたり、大学院農学生命科学研究科附属農場において、自衛消防訓練が実施された。この訓練には、農場とアジア生物資源環境研究センターの教職員・学生、農場博物館ボランティアの合計 47 名が参加し、西東京消防署西原出張所の指導を受けながら進められた。

農場本館１階から火災が発生したという想定で、初期消火に係る火災報知器の発報や消防署への通報等の後、誘導にしたがって、また建物内に逃げ遅れた者がいないかを確認しながら集合場所の中庭へ避難した。また、避難後には人員確認を行う等、実戦さながらの訓練を行った。

その後、中庭において、消火器を使用した消火訓練を行った。消防署からの詳細な説明の後、これまで消火器を使ったことのない者を中心に消火訓練を行った。

後半では、自動体外式除細動器（ＡＥＤ）の使用を含む救急救命講習を受けた。救急救命士から心臓マッサージや人工呼吸の方法、またＡＥＤの使用方法等をわかりやすく実演していただき、迅速な措置が命を救うことを学ぶことができた。

最後に西東京消防署より講評をいただき、堤伸浩農場長から本日の訓練参加への謝意が述べられ、農場敷地内の教職員・学生・ボランティアのほとんどが参加した自衛消防訓練は無事終了した。

中庭での消火器による消火訓練

マネキンを相手に救急救命を行う学生

部局

先端科学技術研究センター

「トライアル連携」によるコンサルティング件数が 100 件を突破

今般、先端科学技術研究センターでは「トライアル連携」における企業向けのコンサルティング件数が 100 を越えた。先端研は、新しい産学連携の試みとして現在、新日本石油㈱、富士電機ホールディングス㈱、㈱デンソーの三社との間で「トライアル連携」を締結している。その特徴は、「共同研究ほど明確ではないが、何らかの連携を考えたい」という企業と研究開発の初期段階から関わっていくという点にあり、多様化するニーズに臨機応変に対応できるだけでなく、研究者側にとっても新しい問題発見や課題設定ができるため、研究活動の活性化にもつながっている。

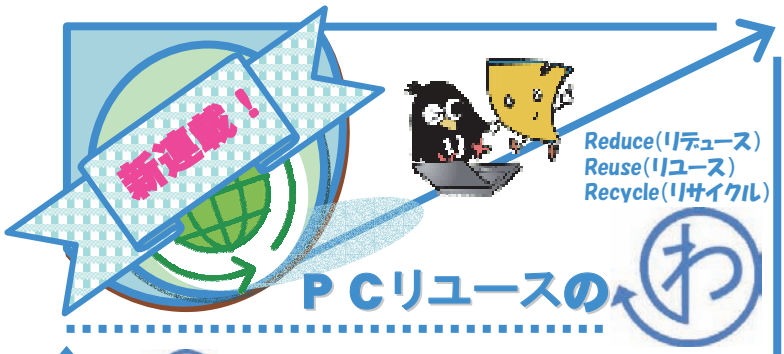
このような仕組みでは、トライアルから具体的な連携を開始するきっかけが必要である。これが東大の教員によるコンサルティングであり、2005 年 10 月の開始から 2009 年 10 月までの全コンサル件数が 107 件に達した。

このトライアル連携では先端研がハブとなって学内他部局と企業の橋渡しをしているのも特徴のひとつで、その場合も先端研の担当者がコンサルに同行するなどのサポートを行っている。実際 107 件のうち、約４分の３が他部局に対するもので、工学系研究科、新領域創成科学研究科、農学生命科学研究科、情報理工学系研究科、総合文化研究科、生産技術研究所など９部局にわたっている。

コンサルティングの結果、企業のニーズと大学のシーズの接点が見えてくるとフィージビリティ・スタディ（FS）を経て、共同研究や大きなプロジェクトへと発展していく。これまでに９件の FS と８件の共同研究・国家プロジェクトが立ち上がっているが、そこに至るまでの費用は、企業と先端研が持ち寄った資金で構成される「共同ファンド」で原則、まかなわれている。従って、この仕組みをご理解いただき、気軽にご利用されることを期待している。

詳細は以下のサイトをご覧下さい。
http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp/ja/partners/trial/index.html

Ｄ社での講演会の模様



第①回 ノートPCリユースオフィスです

はじめまして。ノートPCリユースオフィスです。

このオフィスでは、研究室で使用していたノートPCを回収し、再生させ、学生さんに無料でレンタルをし、最後はリサイクルをする事業のお手伝いをしています。

この事業を始めたきっかけは、当時の学生担当理事がとりあげたある学生さんからの一通の投書でした･･･。

―構内の廃棄品であるパソコンをリサイクルして欲しい ―

そんな要望を実現させるために設置されたこのオフィスは、いわば、バーチャルな部署です。窓口はメインスタッフのいる本部棟2階の資産経営G(グループ)にありますが、この事業で行う全てのことはWG(ワーキンググループ)で決めています。WGには財務系の資産経営Gのほかに、教育・学生支援系、情報系、調達Gから選りすぐりのスタッフが参加し、それぞれの専門分野から知恵を出し合い進めてきました。また、前事業担当理事の岡村定矩先生、現担当理事の小島憲道理事(副学長)、総長補佐の中畑雅行先生、河東泰之先生、情報システム本部の玉造潤史先生･･･と沢山の方のご助力があり、少しでもいいものを作ろうと検討を重ね、実現に至りました。当初、ほんの少人数で始めた計画が、他の部署、そして各部局の担当部署や研究室にもご理解いただき、協力が得られ、徐々に徐々にその「わ」は広がってきています。そして今、その「わ」に学生さんを含め、未来永劫続く「PCリユースのわ」を東京大学内につなげていきたい･･･と願っております。

さてさて、こうして始まったリユース事業は、９月18日(金)に第１回目の学生さんへの募集を開始しました。各部局研究室のご協力により37台のリユースPCを用意してスタート。本当に学生さんは応募してくれるだろうか、見向きもされなかったら･･･と不安を募らせながら、蓋を開けてびっくり！！なんとそこには･･･
以下次号！　(青)

メインスタッフの高橋と青木

★７月･８月･９月各部局ご提供ＰＣ★

農学部 14台	工学部 13台	医学教育国際協力研究センター 9台
薬学部 6台	情報理工学系研究科 4台	
文学部 2台	経済学部 2台	生産技術研究所 3台
理学部 1台	教育学部 1台	東洋文化研究所 1台
地震研究所 1台	海洋研究所 1台	先端科学技術研究センター 1台

以上59台のノートＰＣのうち、37台を再生することができました。どうもありがとうございました。引き続きよろしくお願いいたします。

- 問い合わせ先：ノートPCリユースオフィス (本部資産経営G内)
  E-mail：pcreuse@adm.u-tokyo.ac.jp
  URL　：http://pcreuse.adm.u-tokyo.ac.jp/
  内線：22135(担当　青木･高橋)
- ノートPC回収先：美津野商事株式会社システム事業部
  E-mail:reuse@mizuno.net　(担当　川崎･石井)
  電話：03-3943-0181　　FAX：03-3943-4180

インタープリターズ・バイブル vol. 28

科学技術振興調整費新興分野人材育成　科学技術インタープリター養成プログラム

研究者とインタープリター

真船文隆
総合文化研究科　准教授
科学技術インタープリター養成プログラム担当

「これまで見えなかったものが見えるようになる」というのは、科学者が研究を進める上で技術的な大きな一歩となる。兵庫県の理化学研究所高輝度光科学研究センターには、SPring-8という特殊な光を発生させるための加速器があり、さまざまな分野の研究者が、自分たちの実験試料を「見る」ためにやってくる。少し前の話だが、和歌山の毒入りカレー事件の捜査の際には、犯行に使われたヒ素とそれに含まれる不純物を正確に同定するためにSPring-8が用いられた。私自身、「そういう使われ方もするんだ」と驚いたことを覚えている。

このSPring-8に併設される形で、さらに夢の光源が現在建設中である。それは、X線自由電子レーザー(通称XFEL)と呼ばれる、強いX線の光を出す巨大な施設である。波長の短いX線(最短波長0.06nm)で、波長0.1nm近辺での明るさはSPring-8と比べて10億倍に達する。これほどの光であれば、タンパク質が1分子あれば、その構造を解析できると考えられている。まさに、「これまでに見えなかったものが見える」ようになるわけで、たとえば、膜タンパク質の構造を解明し機能を理解して新薬の開発につなげるなど、基礎科学の発展のみならず社会的な波及効果も大きいと考えられている。XFELの建設と並行して、それを利用する研究プロジェクトが動きつつある。私も、上記の1分子たんぱく質解析のプロジェクトに関与し、文部科学省、科学技術振興機構(JST)からの業務委託で研究を進めている。実はこの「業務委託」には、はじめかなり戸惑った。普通、研究を進めていくと、必ずしも当初思っていたこととは違う方向性に進むことがある。またそれがとてつもない発見につながることがあるわけで、そのマージンを保証してほしいところである。しかし、業務委託はそもそも意味合いが違い、年度初めに計画したことは、必ず実験することが求められる。したがって、年度末の報告書には、計画書で書いた内容と1対1で対応するように報告する必要がある。

冷静に考えると、当たり前のことである。明確な目的に向かって、ロードマップに従って突き進んでいかなければならない。しかし、当たり前だと納得したのは、JSTの調査員の方とお話した時かもしれない。その方は、もともと物理学がご専門で、学位を取得した後研究を発展させて、どちらかというと化学よりの「ソフトマター」を研究されていた。研究分野は必ずしも近くはないが、研究者は研究者どうし共鳴するものがある。しっかりした研究のバックグラウンドを持った上で、現在は、研究者とJSTの橋渡し役をされている、これぞまさに科学技術インタープリターなのかもしれない。でも、なんとなくJSTにうまく丸めこまれている･･･ような気もする。

★科学技術インタープリター養成プログラム
URL:http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/

※この連載では、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースを、当センターの取組みの様子、活動状況などと共にご紹介していきます。

PARI一周年記念フォーラム

「政治」から「政策」へ

10月28日（水）、工学部2号館にて、政策ビジョン研究センターの1周年記念フォーラムを開催いたしました。

新政権が発足し、政権選択をめぐる「政治」から「政策」へとギアチェンジをするべき節目の時期に、当センターが蓄積した研究成果や研究途上の調査結果等をとりまとめて発信する機会となりました。

前半は、濱田純一総長の基調講演に続いて、当センターの研究成果として、高齢者社会と医療のIT化、知的財産権制度、北東アジアの安全保障、技術ガバナンス、航空政策などの取り組みが紹介されました。

後半のパネルディスカッションでは、森田朗センター長をコーディネーターとし、鈴木寛 文部科学副大臣 林芳正 元経済財政担当相 楠田大蔵 防衛大臣政務官、古川俊治 参議院議員、藤末健三 参議院議員、増田寛也 元総務相・公共政策大学院客員教授、濱田純一総長（下に各パネリスト写真掲載）が加わり、今後の当センターが行う活動の方向性や、社会とのインタラクションの仕組みをどう構築するか等の点について、期待のこめられた活発な議論が交わされました。

「大学からの政策発信」濱田総長 基調講演

民主主義社会における大学の学術は、その本領というべき純粋な、突き詰めて考え抜く力を、社会から隔離された状態で育むのではなく、むしろ積極的に社会とかかわることによって鍛え上げ、成長させていくべきものと考えています。

政策ビジョン研究センターのスキームである「政策発信」は、大学の公共的な機能の表現であるとともに、大学の学術の強化にもつながるものです。

政策研究に欠かせない、選択肢の立案とエビデンスによる裏打ちは、きわめて具体的な作業であり、学問分野の境界を超えた作業となります。

個別具体のケースの扱いこそ、政策研究の本領であり、醍醐味ですが、このような個別具体の政策研究を数多く丁寧に積み重ねていく中で、一般性を備えた枠組みとなるものが見えてくることがあります。

それとともに私が期待したいのは、個別の課題テーマを越えた「時代の政策」、これからの時代の姿を形造っていく政策カタログが見えてくることです。

これからの社会がどうなるのかと、多くの人々が不安を抱いている現代のような危機の時代にこそ、知識の創造的な役割、大学の果たすべき役割は大きくなります。

政策ビジョン研究センターの研究成果の発信は、そうした時代の課題、とりわけ、医療や高齢化、地球環境など、早急な対応が社会から求められている課題に、しっかり応えてくれるはずです。

こうした役割は、東京大学だけで果たせるものではありません。社会の知とのインタラクションが必要です。本日の議論を通じて、そうした大学の知と社会の知の連環の仕組みやセンターの取組みの方向性などについて、さまざまなご示唆をぜひいただければと思っています。

パネルディスカッション 「これからの政策形成と大学の役割」

※敬称略。詳細はHPに掲載しています。

エビデンスに基づく政策形成

鈴木 関係当事者のネットワークコミュニティを形成し、自立分散協調型の熟議の民主主義ができればいいと思ってきた。政策ビジョン研究センターにはそうしたシンクネットの編集局として、コミュニティをオーガナイズしていただきたい。

林 最終的な法律をつくる手前のポリシーをつくるのがシンクタンクの役割。霞が関と同じ元データを共有した上で、独自の観点から加工し、ポリシーの選択肢をつくって頂きたい。メディアとの連携にも取り組んでほしい。

古川 政策提言は幅広くパッケージで行うのが実務の世界。従来の政策決定は審議会等で府省よりの学者が影響力を持っていた。しかし政治主導でやるのであれば、国会が政策提案能力を持たなくてはいけない。むしろ学者の意見を国会が実質的に法案等に取り入れるべき。

楠田 これから政治任用が増えていく中で、政策を立案の担い手となりうるような若い世代を養成するのも大学の役割と思う。

藤末 官僚機構がオプションを提示するというシステムが壊れない限り、二大政党制は無理。政策オプションを、長期的な観点から提示することを大学に期待したい。

増田 国の場合、大学との接点は審議会だが、これが変質して官のお膳立てのようになっていた。政権交代により、我が国のシンクタンク機能が霞ヶ関のみだったところが大きく変わるチャンス。個別の課題を越えた「時代の政策」をしっかりと捉えて提示をしていくことが大事。

本来の大学のあり方

濱田 政策をめぐる力や発想をどう汲み上げ、編集するかは大切なテーマ。実質的な提案をする一方で、一種の政策目標になる理念や、時代の感覚といった、非合理的な部分の扱い方が大事になる。決定的に正しい答えが見つけられないときには、政策形成のプロセスが大切になる。

（下の写真は発言順に並んでいます）

研究成果紹介

坂田一郎教授（政策ビジョン研究センター）
「センターの全体ビジョン」

秋山昌範教授（政策ビジョン研究センター）
「高齢化社会と医療のIT化」

渡部俊也教授（先端科学技術研究センター）
「知財とイノベーション」

鈴木真二教授（工学系研究科）
「航空イノベーションの原点と課題」

藤原帰一教授（法学政治学研究科）
「北東アジアの安全保障」

城山英明教授（法学政治学研究科）
「技術ガバナンス」

アジア知財学術カンファレンス

11月12日（木）、京都大学芝蘭会館にて、アジア知財カンファレンスおよび、3極特許庁長官との対話会議が開催されました。制度のユーザーとしての大学の役割が高まっているとの我々の提言（「未来を創造する特許制度のための15提言」）を踏まえた議論が交わされました。詳細は次号にてご報告します。

http://pari.u-tokyo.ac.jp

Crossroad~産学連携本部だより~ vol. 48

Crossroad：
交差道路や、道が交差するところにある集会場を意味します。産業界と研究者のクロスする場所の意味をこめます。

150名以上の参加者の頂点に立つ最優秀チームが決定！
第5期東京大学アントレプレナー道場の最終発表審査会・表彰式が開催されました

影山審査委員長（産学連携本部長）から最優秀賞を授与されて喜ぶ Akala Projectのみなさん

参加チーム概要
【最優秀賞】「食情報のバリアフリープロジェクト」Akala Project
（代表：Kharrat Mohamed 学際情報学府修士2年）
【優秀賞】「小型自転車レンタルシステム「モビクル」の提案」
ロンダロンダ（代表：二岡佑介 新領域創成科学研究科修士2年）
【優秀賞】「次世代創薬プラットフォームの事業化」
チームEPRIL（代表：平野知宏 医学系研究科特任研究員）
【次点】「Our Future Your Power」
KUMO （代表：伊藤裕一 学際情報学府修士1年）
・「喫煙コストを見える化し、禁煙デリ®でお得に健康」
チーム禁煙（代表：酒匂赤人 医学系研究科修士1年）
・「アマチュアミュージシャンからのスターアーティスト創出事業」
チームutly（代表：水上博貴 経済学部3年）

10月17日（土）、東京大学情報学環・福武ホールにて「第5期東京大学アントレプレナー道場（以下道場）」ビジネスプラン最終発表審査会・表彰式が行われました。4名の審査委員（影山和郎産学連携本部長、郷治友孝㈱東京大学エッジキャピタル代表取締役社長、山本貴史㈱東京大学TLO代表取締役社長、高井正美日本MITエンタープライズ・フォーラム副理事長）による厳選な討議の後、最優秀チーム1チーム、優秀チーム2チームが選ばれました（左下に詳細を明記）。

道場は150名を超える登録者で初級コースがスタートし、中級コースを経て、9月の上級コースには6チーム（25名）の学生が進出しました。最終発表審査会では、「事業としての新規性、社会へのインパクトの大きさ」「ビジネスプラン全体としての合理性・整合性」「プレゼンテーション・スキル」の3つの審査ポイントに対し、各チーム15分間のプレゼンテーションを行いました。

発表スライドだけではなく、デモンストレーションや衣装にも各チーム工夫を凝らし、審査委員からの厳しい質問には、チーム内で協力しながら回答するなど、約6ヵ月間の道場の成果を遺憾なく発揮した発表となりました。表彰式では、審査委員から6チームともハイレベルで評価をつけるのが難しかったとの講評があり、かなりの激戦だったことがうかがえました。

今回の最優秀チーム、優秀2チーム、次点チームの中から10名が11月に行われる北京大学ビジネスプランコンテスト学生チームとの交流プログラムに参加する予定となっています。

産学連携本部 紹介コーナー　TLF（テクノロジー・リエゾン・フェロー）のみなさん

産学連携本部には、自治体等公的機関の職員を対象とした、大学・産業界・官公庁との間の産学官連携を推進・管理する専門家育成制度、テクノロジー・リエゾン・フェロー（TLF）があります。今年度研修に来ている第10期TLFの6名のみなさんを、2回にわけてご紹介します。

産学連携本部、産学連携研究推進部に所属する第10期テクノロジー・リエゾン・フェロー（以下TLF）の6名のみなさんは、自治体から1年間、研修に来ています。

研修の内容は、産学連携に関連した各種基礎知識についての講義と学内外各種機関の視察に加え、東京大学の産学連携創出スキームによる産学連携実務の習得として、教員インタビュー、共同研究テーマ提案WEB検索システム「東京大学産学連携プロポーザル」（詳細は次号で紹介）の運営および企業とのマッチング活動があります。4月に研修を開始して約半年が過ぎたところで、みなさんに感想をうかがいました。「東京大学はたくさんの技術シーズの宝庫だと実感します。インタビューを通じて、日本屈指の先生方とつながれるのが最大のメリットだと思います」「自治体にいたら絶対に経験できない多くのことを体験させてもらっていると感じます。貴重な機会を大切にしていきたいです」

教員インタビューは年間約300回。インタビューに飛び回るTLFのみなさんの姿を本郷・駒場・柏キャンパスで目撃することも多いでしょう。

末澤保彦さん
（香川県 産業技術センター）

清水芳忠さん
（神奈川県 産業技術センター）

有賀　俊さん
（東京都文京区 区民部アカデミー推進課）

上野　桂さん
（青森県 工業総合研究センター）

萩原　茂さん
（山梨県 工業技術センター）

森田英樹さん
（奈良県 商工労働部商工課）

※（ ）の中は直前まで所属していた部署

連絡先：産学連携本部（本部産学連携グループ）
電　話：内線22857（外線03-5841-2857）
WEBサイト：http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/

DUCR 検索

DUCR Division of University Corporate Relations The University of Tokyo

Relay Column

ワタシのオシゴト／第45回

Rings around the UT

農学系事務部経理課経費執行チーム

松峯 正典さん

30年後に天命を知る、それもお仕事

デスクトップが溢れそう

これまで外部資金の受入から予算とか調達をやってきましたが、どれもこれも鋼の会計ルールに則って進めなくてはならないことばかり。仕事は増える一方なので、頭を使って複数のタスクを同時に把握しないとすぐに仕事が溜まります。どんどん溜まります。ただ仕事で成長して、同時に改善することもできる。そんな仕事にやりがいを覚え始めて今年は採用７年目。まだまだ裾野を歩く日々。あと20年もすると自分も変わると思いますが、世界はより想像もつかない世の中になっているでしょう。想像を超えた未来の科学技術は、日々の調達や外部資金の仕事が、あるいは支えているかもしれないと考えると、苦しい時でも頑張れます。

農学部のオアシス「中庭」にてパチリ

激変する環境の中で耐え抜く智慧を様々な場面で吸収していくことが今後の目標です。

30にして立つ力を、40にして惑わない精神を、そしてその先へ・・・・私のお仕事が与えてくれると信じて。

得意ワザ：時々作曲ができます
自分の性格：ヒョウヒョウとしているとよく言われますが、ヒョウヒョウって何？
次回執筆者のご指名：川口安名さん
次回執筆者との関係：今でも頭があがりません
次回執筆者の紹介：恐そうに見えますが、優しい方です

コミュニケーションセンターだより No.62

■今年も出店しました「文京博覧会」

毎年恒例の「文京博覧会」に今年も出店して参りました!!

多くの物産展や、文京区伝統工芸など楽しいイベントが盛りだくさんでお客様も賑わっていました。

コミュニケーションセンターのブースでは、「光触媒シート」が人気No.1でした。月に1～2回天日干しするだけで半永久的に何度でも繰り返し使える脱臭シート。皆さんもこの画期的な商品、是非一度使ってみて下さい!!

■柏キャンパス一般公開　初出店!!

今年は柏キャンパスで初の出店をして参りました。周囲は緑豊かで、建物は近未来都市を思わせるような素敵なキャンパスでした!!

初めての出店だったので勝手が分からずドキドキしていましたが、いらっしゃるお客様が東大研究成果商品に大変興味を持っていらしたので、楽しくご紹介することが出来ました。また、コミュニケーションセンターの存在を既に知っているという方も多く、嬉しい限りでした。

柏キャンパスでもやはり「光触媒シート」が一番人気でしたが、東大サプリメントの「体力式アミノ酸」も大好評でした。

最近とても寒くなり、空気も乾燥していますね。皆さんも「体力式アミノ酸」を飲んで風邪を引かぬよう強い体を作りましょう!!お勧めです!!

（担当：UTCC　山下）

The University of Tokyo

東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30
電話：03-5841-1039
http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp

ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～

東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください！

イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信！
■この記事のQRコードから
■mail@utnav.jp宛てにメール送信
■携帯サイトutnav.jpにアクセスして
　メルマガ登録ページへ
※携帯電話・PCどちらからも登録可能

↓

返信メールから登録画面に入力！
■ご所属
■性別・年齢など

↓

登録完了！
■登録確認メールが届きます
■隔週でメルマガ・お得なクーポンGET!

イベントを宣伝したい方

携帯・PCサイトで申し込めます
■http://utnav.jpにアクセス
■イベント掲載フォームから送信！
■追ってスタッフよりご連絡致します
教育企画室TREEオフィスまで！
■内線；27823
■メール；info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
■オフィス；本郷キャンパス
　第二本部棟403号室

噴水

安田講堂前広場に新たな芝生誕生

本郷キャンパスの安田講堂前広場は長年荒廃していました。今夏、本学で開催された日本芝草学会（大会委員長 山下修一 農学生命科学研究科准教授）の寄附行為により、暖地芝「バーミュダグラス（*Cynodon dactylon*）」が数社の企業等のご協力により造成され、この度、ほぼ完成しました。本芝はC_4型芝草で、冬期には日本芝と同じく地上部は枯れます。冬期での緑化保持のために寒地型芝草「ライグラス（*Lolium multiflorum*）」が10月末にオーバーシードリングされ、同広場が春夏秋冬を通じて周年緑化が楽しめると思います。今後は芝地の維持管理には恒常的な対応が欠かせませんが、これらには東大内に「東大芝生倶楽部」設立し、同好の士を募っています。芝生、緑化などに興味ある学生・院生・教職員の方は身分に関係なく、同倶楽部（ashui@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp）または「芝生応援団グラス・ルーター事務局（grhq@xqj.biglobe.ne.jp）にご連絡下さい。

新たに造成された安田講堂前広場の芝生

第 33 回東京大学伊豆・戸田マラソン大会が開催される

恒例の東京大学伊豆･戸田マラソン大会が、10 月 25 日（日）に開催された。コースは、静岡県西伊豆の東京大学戸田寮（沼津市戸田地区）を基点とする 42.195 kmのフルマラソンコース、西浦市民窓口横を基点とする 22 kmのハーフマラソンコースがある。途中に標高差 500 mの山道を含むなど、通常に比べかなりの難関コースだが、日本有数の景勝地として知られる西伊豆の自然を体感しつつ走ることができるため、参加者から例年好評を博している。

大井さんゴールシーン

大会当日は朝から強風と時折の雨に見舞われ､選手･スタッフともに厳しいスタートとなったが、フルマラソンの部、総勢 91 名（卒業生 14 名、沼津市民７名等を含む）が参加し、85 名が無事に完走した。個人総合の部では卒業生の大井寛己（おおい・ひろき）さんが､第 30 回大会以来３年ぶりの優勝を果たした。また、団体の部では、優勝者の大井さんを中心としたチーム「飛走会」が２大会ぶりの優勝となった。

ハーフマラソンの部では、沼津市在住の榎本洋（えのもと・ひろし）さんが１時間 36 分 44 秒のタイムで優勝した。その他の参加者も好走し、本大会では合計 96 名がこの難コースを完走した。

大会前日の開会式及び懇親会には、東大関係者と栗原裕康市長を始め地域関係者が多数出席した。

レース中は、小雨が降り肌寒い天候だったが、沿道からは沼津市民の子ども達からお年寄りまでたくさんの温かな声援が送られた。

秋の西伊豆路を周回する伊豆・戸田マラソンへ来年も奮ってのご参加をお待ちしています。

フルマラソンスタート風景

第 33 回東京大学伊豆・戸田マラソン大会結果

【個人の部】＜東京大学総長杯＞

順　位	氏　名	時　間	備　　考
優　勝	大井　寛己	2:54:47	卒業生
準優勝	柏原　崇人	2:58:01	理学系・大学院生
第３位	貴田　大樹	3:00:51	農学系・大学院生
第４位	鈴木　晴哉	3:05:42	沼津市民
第５位	田辺　克彦	3:08:00	卒業生
第６位	工藤　健一	3:12:18	工・学部生

【団体の部】＜沼津市長杯＞

（上位３位の平均順位が少ないチーム）

順　位	チーム名	平均順位	備　　考
優　勝	飛走会	7.7	卒業生・学外
準優勝	自走会－本命	17.4	学部生・大学院生
第３位	Doo － Upper は私です‼	24.2	学部生・大学院生

【女子の部】

順　位	氏　名	時　間	備　　考
優　勝	水野　淳子	4:20:29	新領域・職員

【学内の部】

順　位	氏　名	時　間	備　　考
優　勝	柏原　崇人	2:58:01	理学系・大学院生

【バカヤロー会長杯】

（第33回大会に因んで3時間33分33秒に一番近い選手）

順　位	氏　名	時　間	備　　考
第 85 位	星野　裕尚	3:33:46	沼津市民

【ハーフマラソンの部】（男子の部）

順　位	氏　名	時　間	備　　考
優　勝	榎本　洋	1:36:44	沼津市民
準優勝	鈴木　幸善	1:48:19	沼津市民
第３位	曽根　享	1:52:32	沼津市民

【ハーフマラソンの部】（女子の部）

順　位	氏　名	時　間	備　　考
優　勝	荒井　裕美	2:10:58	農学系・職員

（本部学生支援グループ）

INFORMATION

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

学生相談ネットワーク本部

総長講演会～「タフな東大生」とは～

本講演会では、「タフな東大生」を育成する課題の今日的意義について濱田純一総長が基調講演を行い、これを受けて、ゲストスピーカーと学生相談ネットワーク本部教員がその具体策を論議します。皆様のご来訪を心よりお待ちしています。

開催日時：　12 月 1 日（火）18：30 ～ 20：30
開催場所：　小柴ホール（本郷キャンパス）
定　　員：　200 名　　※要事前予約（先着順）
参 加 費：　無料
対　　象：　本学学生・教職員
主　　催：　学生相談ネットワーク本部

■プログラム概要
18：30　開会の挨拶　学生相談ネットワーク本部
本部長　古田　元夫
18：30 ～ 19：10　総長講演「タフな東大生」とは
東京大学総長　濱田　純一

19：10 ～ 20：10　パネルディスカッション
パネリスト
濱田　純一（東京大学総長）
小島　憲道（理事（副学長））
尾嶋　正治　教授
（大学院工学系研究科・工学部）
恒吉　僚子　教授
（大学院教育学研究科・教育学部）
倉光　　修　教授（学生相談ネットワーク本部）
佐々木　司　教授（学生相談ネットワーク本部）
コーディネーター　亀口　憲治　特任教授
（学生相談ネットワーク本部）
20：10 ～ 20：30　質疑応答

■参加登録
（1）ホームページからの申込
http://dcs.adm.u-tokyo.ac.jp/event/
（2）E-mail・FAX・電話での申込
氏名、所属・身分、連絡先をご記入の上、下記までお申し込み下さい（書式自由）。
・E-mail ： nandemo@adm.u-tokyo.ac.jp
・FAX　： 03（5841）0333
・TEL　： 03（5841）7867/0786
■問い合わせ先
学生相談ネットワーク本部
なんでも相談コーナー　内線 27867/20786
nandemo@adm.u-tokyo.ac.jp

シンポジウム・講演会

生物生産工学研究センター

生物生産工学研究センターシンポジウム「環境細菌の動態研究から見える新しい微生物機能」開催のお知らせ

生物生産工学研究センターでは下記の要領でシンポジウムを開催します。参加申し込みは不要です。
多くの皆様のご参加をお待ちしております。
日時：12 月 11 日（金）13：00 ～ 18：00
場所：東京大学弥生講堂一条ホール（講演）
弥生講堂アネックスセイホクギャラリー（懇親会）
時間割：
13：00　開会挨拶
13：10　野村暢彦（筑波大学）
「環境中の微生物生態解析に向けて：
Meta-cellular から Sub-cellular まで」
13：40　岡部聡（北海道大学）
「水環境保全とバイオフィルム：次世代型窒素除去システムへの応用」
14：10　津田雅孝（東北大学）
「環境汚染物質分解能を担うプラスミド」
14：40　野尻秀昭（生物生産工学研究センター）
「環境細菌の動態を決めるプラスミドの働き」
15：10　休憩
15：25　浜崎恒二（海洋研究所）
「超並列シーケンスが描く海洋微生物圏の多様性とダイナミクス」
15：55　南澤究（東北大学）
「植物共生微生物と温室効果ガス：根圏土壌生物のランチタイム」
16：25　渡邉一哉（JST ERATO）
「微生物間相互作用と生態系機能」

16：55　鎌形洋一（産業技術総合研究所）
「メタン生成古細菌を中心とした微生物間共生機構の解明」
17：25　石井正治（農学生命科学研究科）
「好熱性水素細菌研究からE-バイオ（Electron-oriented Biotechnology）まで」
17：55　閉会挨拶
18：00　懇親会

懇親会会費：2000円（当日申し受けます）
懇親会参加申し込み：辻田（tsujita@ofc.a.u-tokyo.ac.jp）まで
問合わせ先：生物生産工学研究センター環境保全工学部門　野尻秀昭　まで
（Tel 03-5841-3064 / Fax 03-5841-8030 / E-mail：anojiri@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp）

シンポジウム・講演会

環境安全研究センター

第19回環境安全研究センターシンポジウム「研究・教育の現場における環境安全管理」

環境安全研究センターでは毎年、環境安全研究センターシンポジウムを開催しています。このシンポジウムでは、環境と安全に関する研究や事例を、各方面の研究者から紹介することを目的としています。第19回目となる今年は、「研究・教育の現場における環境安全管理」をテーマとしてお送りします。

本学を含めた大学等の研究・教育機関では、日夜さまざまな分野での実験研究や教育活動が行われています。このような活動にはさまざまな有害物質や危険作業が関わっていますが、これらの物質管理や作業管理を疎かにすると、作業者の安全や環境安全が脅かされることになります。

研究・教育の現場においてはどのような環境安全管理がなされるべきなのか。また、どのような安全教育が求められるのか。本シンポジウムでは、このような検討の手助けになるべく、事故災害の防止、有害物質の管理、環境安全教育などの側面から5名の研究者が講演を行います。本テーマに興味をお持ちの方、ご自身の研究室での環境安全対策に関心をお持ちの方など、多くの方々のご参加をお待ちしています。

日時：12月22日（火）13：15～17：00
場所：東京大学弥生講堂・一条ホール
（〒113-8657 東京都文京区弥生1－1－1　東京大学農学部構内）
参加費：無料

＜プログラム＞
「挨拶」新井 充　環境安全研究センター長
「特別講演」
　山田 一郎　　東京大学副学長・環境安全本部長
「講演」
　飯野 謙次　　特定非営利活動法人 失敗学会
　大久保 靖司　環境安全本部
　大島 義人　　大学院新領域創成科学研究科
　尾張 眞則　　環境安全研究センター
　戸野倉 賢一　環境安全研究センター　（50音順）

お申込み方法：電子メールまたは往復はがきにて、住所・氏名（返信用はがきにも）・電話番号・職業をご記入の上、12月15日（火）までに以下の宛先までお申込み下さい。
〒113-0033　東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学環境安全研究センター
（http://www.esc.u-tokyo.ac.jp/）
E-mail：escsympo@esc.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第524（11月4日）号の発行 ――教員による、学生のための学内新聞――

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、駒場保健センターで無料配布しています。バックナンバーもあります。

第524号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

石田勇治：ベルリンの壁開放から二十年
松原隆一郎：柔道・七大戦ルールという文化財
矢口祐人：外国特派員が見る日本
寺田　至：独り言
渡會公治：身体運動科学シンポジウム「直立二足歩行を考える」
増原英彦：ソフトウェアのモジュール性とアスペクト指向
〈本の棚〉
村松真理子：山本史郎著『東大の教室で『赤毛のアン』を読む――英文学を遊ぶ9章』（東京大学出版会、2008年12月）を読む
梅景　正：丹野義彦著『ロンドン　こころの臨床ツアー』

〈時に沿って〉
西村　弓：「駒場」の手触り
中澤公孝：人間の身体の可能性を求めて

室内楽演奏会（12/15）
ジェネリックスキルとしての討議力（11/13）
南米のハープ音楽（11/14）
教養学部選抜学生コンサート（11/14）

お知らせ

大学院農学生命科学研究科・農学部

千葉演習林　一般公開のお知らせ ー森林や研究の話を聞きながら、紅葉に染まる渓谷を散策しに来ませんかー

大学院農学生命科学研究科附属演習林・千葉演習林では、紅葉のシーズンにあわせて亀山湖上流にあたる猪ノ川渓谷（千葉県君津市）を一般に公開いたします。当イベントは今秋で 14 回目を迎え、例年数千人から 1 万人の方にご来場いただいております。

公開期間は 11 月 28 日（土）、29 日（日）、12 月 5 日（土）、6 日（日）の 4 日間、公開時間は各日とも 9 時から 16 時までとなっております。公開区間は渓谷沿いの平坦な林道約 2 km と林内のやや急峻な歩道約 1 km からなっており、幅広い年齢層の方にお楽しみいただけます。また教職員や専属ボランティアが随時、森林、生物、研究などについてガイドを行っておりますので、ガイドをご希望の方は、学内広報をご覧になった旨スタッフまでお伝えください。

この時期の猪ノ川渓谷は、落葉樹と常緑樹による赤・黄・緑のコントラストが美しく、大変ご好評を得ております。 皆様もこの機会に、ご家族、ご友人をお誘い合わせの上、ぜひおいで下さい。公開区間の地図、注意事項など、詳細は下記ホームページをご覧下さい。

大学院農学生命科学研究科附属演習林・千葉演習林
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/chiba/

猪ノ川沿いの紅葉

人気スポットの黒滝

お知らせ

情報基盤センター

冬休み前にマスター！“情報探索ガイダンス”ご案内

情報基盤センター図書館電子化部門では、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを開催しています。

パソコン実習を交えた、わかりやすい説明で好評です。本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

●日程・コース概要：

■12/4（金）16：00 ～ 17：00　日本の論文を探すには？

日本国内の雑誌論文の代表的なデータベース「CiNii」（サイニイ）の使い方を中心に解説します。

■12/8（火）16：00 ～ 17：00　電子ジャーナルで論文を入手

ScienceDirect などの電子ジャーナルサイトを例にとって、利用方法を解説します。また、「UT Article Link」（東京大学学術論文リンク）を使って、データベース検索結果から電子ジャーナルへアクセスする方法も紹介します。

■12/9（水）12：10 ～ 12：30　自宅から検索するには？（20 分のワンポイント講習会）

自宅からデータベースや電子ジャーナルを使う方法だけ、知りたい。そんな方にお奨めなのが、このコース。ECCS アカウント認証による SSL-VPN Gateway サービスを紹介します。

■12/10（木）11：00 ～ 12：00　文献検索早わかり

図書、電子ジャーナル、雑誌論文、新聞記事など、各種文献の探し方を、まとめてコンパクトに実習します。

■12/16（水）16：00 ～ 17：00

文献リストをサクっと作成～ RefWorks を使うには～

Web 上で使える文献管理ツール「RefWorks」の基本的な使い方を説明します。データベースからのデータの取り込み方、参考文献リストの自動作成方法などを実習します。

●会　場：

本郷キャンパス　総合図書館 1 階　講習会コーナー

●参加費：無料

●予約不要

各回先着 12 名。直接ご来場ください。

●ご希望の内容で。オーダーメイドの講習会も受付中。

ご希望の内容、日時、会場などに応じたオーダーメイドの講習会を承っています。既成の講習会では物足りない、という方にお勧めです。

卒論指導や進学予定者のガイダンスなど、授業の 1 コマや、ゼミなどにご活用ください。

ご希望の内容、日時、会場、人数、連絡先を、メールで下記までご連絡ください。（無料）

下記サイトをご参照ください。

（http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html）

●講習会やデータベース情報などを見逃さないために。

Litetopi メールマガジン発信中。

当係発行の Litetopi（リテトピ）メールマガジンは、本学所属の方を対象に、各種データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記までメールでご連絡ください。（無料）

●お問い合わせ：

学術情報リテラシー係 03-5841-2649（内線：22649）

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html

あなたの撮った写真を学内広報に載せませんか？

学内広報では、教職員の皆さんが撮影した写真を募集します。あなたも自らの写真の腕を学内で披露してみませんか？

■応募条件

1. 東大のキャンパス内で撮影した写真であること

本郷に限らず、東大の敷地内ならどのキャンパスでも可。また、キャンパス内で撮った写真であれば、風景写真でなくても可。人、動物、モノが写った写真でもかまいません。

2. デジタルデータで送付すること

撮影はデジタルカメラ、あるいはカメラ付き携帯電話で行い、デジタルデータ（jpeg、tifのいずれか）をメール添付で送ってください。

3. 1回の応募につき3枚まで受付

多量の写真データ送付はご遠慮ください。
（添付ファイルの合計容量は5MBまで）

■掲載基準＆掲載方法

学内広報編集スタッフが独断と偏見に満ちたセレクション（笑）を行い、スペースの空いたページに掲載します。掲載の際には、「作品名」と「撮影者」のクレジットを記載します（匿名希望も可）。また、良い写真が多数集まった場合は、応募写真を紹介する特集、応募写真を紹介する連載なども予定しています。

■締切

特にありません。良い写真が撮れたら送ってください。

■送付先

本部広報グループ広報企画チーム
「学内広報写真募集係」まで。
E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

読者投稿写真 No. 5

夕日に向かって

久しぶりに構内を散歩しようと三四郎池から安田講堂の裏へと抜けると、少し長く続く坂道を夕日がやさしく照らしていました。一緒にいた末の娘もいつの間にか走り出していました。

（撮影：医学系研究科　准教授　金井克光さん）

読者投稿写真 No. 6

武田先端知ビルスーパークリーンルーム

最高でクラス１（連邦基準）と日本屈指のクリーン度を誇る武田先端知ビル・スーパークリーンルームは、大規模集積システム設計教育研究センターと工学系研究科が運営する共同利用のナノ加工拠点です。半導体微細加工技術を駆使した先端デバイスが、このクリーンルームから誕生しています。本郷や駒場から多くの利用者が研究に活用しているだけでなく、文部科学省から委託を受け、国内の研究者に広く公開されています。

（撮影：工学系研究科　技術専門員　中村美雄さん）

訃　報

二瓶剛男名誉教授

本学名誉教授・二瓶剛男先生は、2009年9月10日、ご逝去なさいました。享年71歳でした。

二瓶先生は、1938年東京に生まれ、1962年3月に東京大学経済学部を卒業、同大学院経済学研究科博士課程を経て、同経済学部助手、法政大学助教授を歴任したあと、1973年4月に東京大学社会科学研究所助教授に着任され、1986年4月に教授に就任し、1999年3月に定年で退職されるまで本学の研究・教育に尽力され、その功績により、1999年5月に東京大学名誉教授の称号を授与されました。定年後は、2001年から2008年に定年退職されるまで、北海学園大学経済学部教授を務められました。

先生は、ソ連を中心とする社会主義経済の理論的・実証的研究に精力を傾けられました。まず、マルクスの再生産表式論を継承し、これを社会主義計画経済の分析方法として援用しようとする国民経済バランス論をめぐる論争を吟味して、この理論の到達点と未解決の課題とを明らかにされました。そのうえで、実際にこの方法を用い、ソ連国民の生活水準を規定する「社会的消費フォンド」に焦点を当てて、ソ連経済の現実の構造を統計的・実証的に分析されました。さらに、第二次世界大戦後から崩壊に至るまでのソ連経済の構造的問題について、企業の自主性を高めて国民経済全体の効率を引き上げ、消費財生産を拡大して国民生活の水準を向上させるという課題が達成されなかったこと、逆に、冷戦構造のもとで特定部門への大規模投資を確保するため、「行政的・指令的方法」による集中的な資本蓄積機構を維持せざるをえなかったことを、丹念に収集したデータにもとづいて明らかにされました。また、ソ連崩壊とともに独立したバルト諸国および中央アジア諸国の市場経済化の比較研究にも、先駆的に取り組まれました。

先生はまた、日本ユーラシア協会会長として旧ソ連諸国の人びととの友好親善に貢献するとともに、『資本論』講座の講師としてその普及に努めるなど、社会活動の分野でも多面的に活躍されました。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

（社会科学研究所）

訃　報

上田孝行教授

社会基盤学専攻の上田孝行教授が、去る９月19日、肺動脈血栓症のため、急逝されました。享年、満45歳。あまりにも早く、また突然のことでした。

上田先生は、昭和38年12月25日、兵庫県城崎郡香住町にお生まれになりました。県立豊岡高校から東京大学に入学、昭和61年、工学部土木工学科を卒業されました。研究者を志して大学院に進学、中村英夫教授に師事し、交通整備が社会経済に及ぼす影響についての分析研究を進められました。本学で助手、講師を務められ、「立地余剰概念を用いた交通改善の影響分析」で博士号を取得されて以降は、東京大学、岐阜大学、東京工業大学の助教授を歴任し、平成17年４月、東京大学教授に就任されました。

上田先生が一貫して取り組んでこられたのは、経済理論と数理モデルを基礎に、土木計画学を補強、高度化する研究でありました。交通整備の影響分析に始まった先生の研究は、都市モデル、便益評価、費用便益分析、財務分析、社会基盤マネジメントなどの領域へ発展し、理論的研究が深化されていきました。

特に、都市群システムの数理モデルにより、国土構造が社会的厚生や交通環境負荷に及ぼす影響を分析した研究、消費者行動理論に立ち返って社会基盤整備の便益評価手法の体系化を目指した一連の研究、応用一般均衡モデルを大規模交通整備の事後評価などに応用した研究、ミクロ経済理論を駆使しての統合都市モデルの開発と政策評価に関する一連の研究、内生的成長論や世代重複モデルなどを応用した、社会基盤整備の長期的投資計画のための理論モデルに関する研究などは、世界的にも高く評価されています。これらの研究業績には、世界交通会議のPacific Rim Prize（環太平洋賞）、土木学会論文奨励賞、高速道路調査会「道路と交通」論文賞など、数々の賞が授与されています。

上田先生は、精力的に進められた研究と同じく、大きな熱意をもって、研究成果の普及、実務への還元、そして後進の指導、育成に力を尽くされました。

とりわけ、費用便益分析の重要性を社会に知らしめ、これを普及させたいという先生の情熱には目を見張るものがありました。平成９年、岐阜大学の助教授時代に企画、開催された「公共投資評価に関するセミナー」には、全国から岐阜に500名を超す参加者が集まりました。その革新的な内容とセミナーの盛況ぶりは、いまでも土木計画関係者の語りぐさになっています。その後も、社会基盤整備の便益評価や経済分析の指針、方向性を示す多くの専門書、一般書の刊行に参画し、大きな役割を果たされました。また、国土交通省事業評価手法検討部会委員、総務省政策評価・独立行政法人評価委員会委員をはじめ、国土交通省、総務省、環境省、内閣府、東京都などの政策評価に関わる多くの審議会・委員会の委員を務められ、積極的な提言を行っておられました。欧州委員会の「交通整備効果の経済評価」プロジェクトにも外部専門家として招聘されるなど、世界的にも広く活躍されていました。

後進の指導に傾けられた情熱も特筆に値するものがあります。大学はもとより、土木学会や応用地域学会等の活動、そして、「経済評価モデル 夏の学校」など、先生が主催された数々の自主セミナーを通して、多くの若手研究者を育てられました。政策研究大学院大学客員教授としての社会人教育にも力を注がれておりました。全国の数多くの若手研究者が、上田先生の実力と、厳しくとも温かいお人柄に惹かれ、先生を敬愛し、また師と仰ぎ、研究を進めていました。去る８月、上田先生が企画、主催された「応用一般均衡分析と交通分析の統合に関する国際セミナー」が東京大学で成功裏に開催されました。このセミナーには、日本側代表として多くの門下生が登壇しました。先生が門下生とともに著した教科書「地域・都市経済分析」の刊行も間近に迫っていました。残念ながら、このようなお仕事が最後となりましたが、門下生とともに成し遂げられたことは、せめてもの救いであったと思います。

東京大学での本格的な後進指導はこれからでしたが、教授に就任以降、経済学や数理分析に関する学部科目を進んで引き受けられ、また、学部では「財務学」、大学院では英語科目「財務学特論」、「社会基盤政策のための動的最適化」を新たに起こし、精力的に講義を行っておられました。また、上田研究室（インフラ財務経済研究室）での経済学に関する研究セミナーを他研究室の学生にも公開して開催し、さらには、専攻内の大学院生や若手教員を対象に数理モデルに関するセミナーを主催するなど、社会基盤教室に経済学や数理モデルの息吹を与え、それを根付かせるために懸命の努力を続けておられました。

上田先生のような卓越した研究者、教育者を失ったことは、社会基盤学専攻はもとより、本学、そして、わが国の土木界にとって大きな損失であります。上田先生の薫陶を受けた多くの若者が、先生の大志を引き継ぎ、先生が目指された土木計画学の高度化に資するべく、研究、教育、実務に邁進されんことを期待してやみません。

上田先生のご功績とお人柄を偲び、ここに謹んで哀悼の意を表します。

（大学院工学系研究科・工学部）

事務連絡

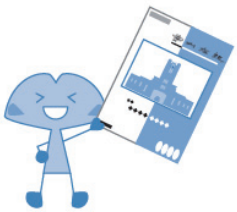
人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

	氏名	異動内容	旧　（現）　職等
		（退　　職）	
21.10.31	中嶋　隆人	辞　職（理化学研究所基幹研究所研究員）	大学院工学系研究科准教授
21.10.31	内宮　博文	辞　職（埼玉大学総合研究機構環境科学研究センター教授）	分子細胞生物学研究所教授
		（採　　用）	
21.10.16	大山　茂生	大学院工学系研究科教授	
21.10.16	日向　太郎	大学院総合文化研究科准教授	
21.11.1	横山　将志	大学院理学系研究科准教授	京都大学大学院理学研究科助教
21.11.1	小宮　剛	大学院総合文化研究科准教授	東京工業大学大学院理工学研究科准教授
21.11.1	竹内　純	分子細胞生物学研究所附属細胞機能情報研究センター准教授	東京工業大学グローバルエッジ研究院テニュア・トラック助教
		（昇　　任）	
21.10.16	山野井　慶徳	大学院理学系研究科准教授	大学院理学系研究科助教
21.10.16	伊藤　純一	大学院農学生命科学研究科准教授	大学院農学生命科学研究科助教
21.10.16	大塚　重人	大学院農学生命科学研究科准教授	大学院農学生命科学研究科講師
21.10.16	青木　不学	大学院新領域創成科学研究科教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
21.11.1	谷口　将紀	大学院法学政治学研究科教授	大学院法学政治学研究科准教授
21.11.1	小野　稔	大学院医学系研究科教授	医学部講師
21.11.1	森屋　恭爾	大学院医学系研究科教授	医学部講師
21.11.1	北中　幸子	大学院医学系研究科准教授	医学部講師
		（配 置 換）	
21.10.16	南谷　崇	大学院情報理工学系研究科教授	先端科学技術研究センター教授

※ 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。
　東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

平成21年度 学内広報 発行 スケジュール



号数	原稿〆切	発行日	配布
1393	学生生活実態調査号		
1394	11月　25日（水）	12月　17日（木）	12月　24日（木）
1395	1月　6日（水）	1月　25日（月）	1月　29日（金）
1396	1月　29日（金）	2月　19日（金）	2月　25日（木）
1397	2月　25日（木）	3月　19日（金）	3月　26日（金）

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。
http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_ j.html
【東京大学ホームページ】→【左下の学内広報アイコンをクリック】

問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ　広報企画チーム
TEL：03-3811-3393　内線22031　E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

「学内広報」ニュース・インフォメーション記事提出要領

作成例

本部広報グループ

「キャンパスツアー」スタート！

本学学生がツアーガイドとなって、赤門や大講堂（安田講堂）、三四郎池、総合図書館など、本郷キャンパス内の名所旧跡を案内する「キャンパスツアー」が今年も始まった。キャンパスツアーは昨年度から実施されており、「ジュニアTA制度」に基づき応募した学生が、東京大学の歴史や学生生活のエピソードを交えながら、約2時間にわたり案内する。

今年度のスタートとなった5月14日（土）には、午前、午後合わせて43人が参加し、ツアーガイドの説明に熱心に耳を傾けていた。

広報センター前で説明するガイドとそれを聞く参加者

ツアーには、高校生以上であれば誰でも無料で参加することができる。今後のツアーは、五月祭期間や年末年始、入試期間を除く授業期間の土曜日と日曜日（10:00～12:00、14:00～16:00）に行われる予定である。

正門から大講堂に続く銀杏並木

記事の冒頭に**部局名**を記載

簡潔で分かりやすいタイトルを記載

・過去の報告記事（ニュース）では「**である調**」を用いる
・今後のお知らせ（インフォメーション）では「**ですます調**」を用いる

日付には括弧書きで**曜日**をつける

・写真を掲載する場合は、25文字以内で**キャプション**（写真の説明文）をつける。写真は3枚程度まで
・原稿とは別に、JPEGなどの形式による元の画像ファイルを別途送付する（プリントの写真は学内便で送付）

句読点は「、」「。」を用いる

時間は**24時間表記**とする

・記事は一行25文字の書式で作成する。
・文字数は800字を目安とするが、内容によって増減は可とする。
・人物名は**フルネーム**で表記すること。

※原稿を受け取った後、学内広報担当者から、必ず受領メールをお送りしています（概ね1週間以内）。返信メールが届かない場合は、何らかのトラブルで原稿を受け取れていない可能性がありますので、その際はお問合せ願います。

提出上の注意

1.提出方法
記事は、各部局の広報担当者を通して、メールの添付ファイルとして送付すること。
（学内広報担当者の個人アドレスではなく、必ず下記のアドレスに送付してください。）
2.締切日
HPで発行スケジュールを確認すること。
http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html
トップページ＞広報・情報公開＞学内広報

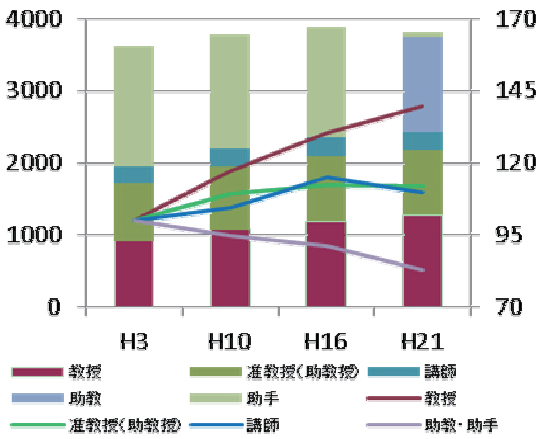
問い合わせ先・提出先
本部広報グループ広報企画チーム
TEL: 03-3811-3393（内線 22031）
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

データで見る「東大のいま」

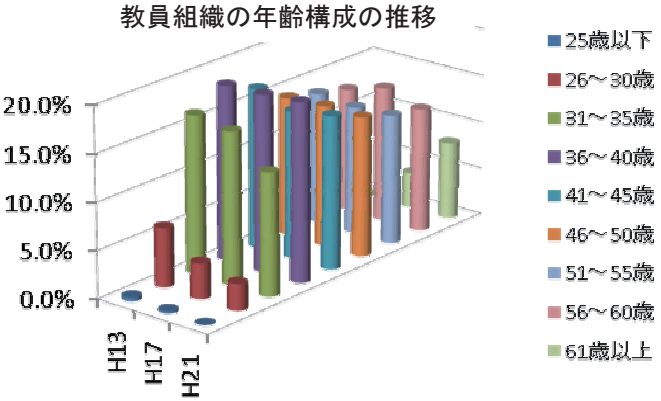
現在、「行動シナリオ」について、科所長や総長補佐の先生方、経営協議会の学外委員の方などと意見交換を行い、様々なご意見等をいただいているところです。

ここでは、意見交換の際に参照されているデータの一部から、現在の東大の姿を探ります。

（人）　教員の職位構成の推移　指数（H3=100）



教員組織の年齢構成の推移



上図「教員組織の年齢構成の推移」を見ると、26～30歳、31～35歳の若手教員層が減少傾向にあるのに対し、61歳以上の教員が増加しているのがわかります。56歳以上の教員は、平成13年度の13.2%から平成21年度では21.1%に増加する一方、35歳以下の教員は平成13年度の22.8%から平成21年度は15.7%に減少し、比率の逆転が起きています。

また、左図「職位構成の推移」を見ると、教授が増加している一方で、助教・助手は減少しています。平成３年度の人数を100とすると、平成21年度では教授が139と４割近く増加しているのに対し、助教・助手は83と、２割近く減少しています。

この原因は、定年延長で教員の定年年齢が延びたことと、定員削減にあたって助教・助手ポストが優先的に削減されていったことにあります。この結果、若手研究者のポストは減少し、プロジェクト的経費によって雇用する特任教員の数が急増しています。

What's going on?

「行動シナリオ」vol. 4

「行動シナリオ」の策定に向けた様々な動きを紹介します。

連絡先：本部企画グループ（内線22393）

教員の人事システム柔軟化が必要

上記データからわかるように、現状の教員構成には大きな変化が生じています。若手研究者の安定的なポストが減少した結果、競争的資金で雇用する特任ポストが急増しています。特任教員はその性格上、どうしても期限付きのポストとせざるを得ません。本来は若い時期にこそ長期的な視点に立って、様々な研究に取り組むべきなのですが、特任ポストの場合、決して長くない任期が終わりに近づくと次の職を探さざるを得ず、落ち着いて研究ができない状況も見受けられます。

大学院生もこのような状況を間近に見ているため、将来のキャリアパスが描きづらい研究職に就こうという学生は減っています。学生のほとんどが大学院に進学する理工系では、優秀な学生が「見切りをつけて」修士課程修了時点で就職してしまう例も散見されます。

将来にわたって日本の教育研究を、ひいては日本の国を支えていくためにも、まずは東大から、この問題に対処していくことが必要なのではないでしょうか。

「行動シナリオ」では、人事システムを柔軟化して優秀な若手研究者を積極的に採用し、全体の力を活性化していく工夫についても考えていきます。世界各地から集った優れた人材が、教育者として、研究者として、思う存分に力を発揮できる場となるよう、教員の多様性を確保し、新陳代謝を促進し、流動化・活性化を促していきます。

【松本洋一郎理事（副学長）談】

下記アドレスでは常時ご意見を募集しています。何かお気づきの点がございましたら、下記アドレスまでお知らせください。

「行動シナリオ」の原案については年明けに、期限を定めて学内や卒業生の方を対象とした意見公募を行う予定です。ポータルサイト等でお知らせします。

「行動シナリオ」ご意見受付専用アドレス：
k-scenario@adm.u-tokyo.ac.jp

Contents

特集

02 平成21年度第1回学生表彰「東京大学総長賞」授与式開催

NEWS

一般ニュース

04 地球観測データ統融合連携研究機構(EDITORIA)
EDITORIA機構長 小池俊雄教授が、中国科学アカデミー（中国科学院）アインシュタイン教授賞を受賞

04 地球観測データ統融合連携研究機構(EDITORIA)
地球観測によるアフリカ水問題解決の支援を目指して－GEOタスクチーム会合開催－

05 本部キャリアサポートグループ
博士課程学生・ポスドク対象企業説明会開催

05 海洋アライアンス
小学校にて出前授業開催

06 本部研究推進グループ
平成21年度「東京大学穂門賞」授賞式が挙行される

07 サステイナビリティ学連携研究機構
環境省S-5 ／ IR3S共催一般公開シンポジウム開催

08 本部キャリアサポートグループ
平成21年度学務研修会実務勉強会を開催

08 海洋アライアンス
「平塚総合海洋実験場」についての記者会見が行われる

09 学生相談ネットワーク本部
教職員のための「学生のメンタルケア」講習会を開催

09 本部奨学厚生グループ
学寮・国際学生宿舎で消防訓練を実施

10 本部総務グループ
名誉教授懇談会の開催

部局ニュース

11 大学院理学系研究科・理学部
大学院理学系研究科・理学部留学生見学旅行を実施

11 大学院教育学研究科・教育学部
多賀先生の特別授業が教育学部附属中等教育学校で行われる

12 医学部附属病院
医学部附属病院で災害対応の一斉防災訓練が実施される

12 大学院農学生命科学研究科・農学部
教職員対象イベント「富士演習林のきのこ」開催される

13 医科学研究所
「慰霊祭」行われる

14 大学院総合文化研究科・教養学部
教養学部60周年記念企画「東大駒場薪能」開催される

14 大学院総合文化研究科・教養学部
三鷹国際学生宿舎にて留学生歓迎会行われる

15 大学院教育学研究科・教育学部
留学生修学旅行で日光を堪能する

16 分子細胞生物学研究所
動物慰霊祭が行われる

16 生産技術研究所
「第５回駒場キャンパス技術発表会」開催される

17 東洋文化研究所
第９回東京大学東洋文化研究所公開講座が開催される

17 大学院農学生命科学研究科・農学部
附属農場、自衛消防訓練を実施

18 先端科学技術研究センター
「トライアル連携」によるコンサルティング件数が100件を突破

コラム

19 新連載　ＰＣリユースのわ　第１回
19 インタープリターズ・バイブルvol.28
20 Policy + alt　vol.03
21 Crossroad　産学連携本部だより　vol.48
22 Relay Column「ワタシのオシゴト」　第45回
22 コミュニケーションセンターだよりNo.62
23 ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～
23 噴水　安田講堂前広場に新たな芝生誕生
24 噴水　第33回東京大学伊豆・戸田マラソン大会が開催される

INFORMATION

シンポジウム・講演会

25 学生相談ネットワーク本部
総長講演会～「タフな東大生」とは～

25 生物生産工学研究センター
生物生産工学研究センターシンポジウム「環境細菌の動態研究から見える新しい微生物機能」開催のお知らせ

26 環境安全研究センター
第19回環境安全研究センターシンポジウム「研究・教育の現場における環境安全管理」

お知らせ

26 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第524（11月４日）号の発行
――教員による、学生のための学内新聞――

27 大学院農学生命科学研究科・農学部
千葉演習林　一般公開のお知らせ
－森林や研究の話を聞きながら、紅葉に染まる渓谷を散策しに来ませんか－

27 情報基盤センター
冬休み前にマスター！ “情報探索ガイダンス”ご案内

訃報

30 二瓶剛男名誉教授
31 上田孝行教授

事務連絡

32 人事異動(教員)

巻末特別記事

34 What's going on?「行動シナリオ」Vol.4

淡青評論

36 学生との交流

◆ 表紙写真 ◆

安田講堂前の芝生
（23ページに関連記事）

編集後記

広報グループに配属されてから早８ヶ月。先輩方のご指導の下、泣いたり笑ったりしながらなんとかここまで辿りつくことができました。日も短くなり、すっかり冷え込むようになりましたが、心を熱くするホットなニュースが広報Gに舞い込んできました！主にコミュニケーションセンターの担当業務で面倒をみてくださる先輩が、なんとこの秋にご結婚なさいました！本当におめでとうございます！このあつあつな話題のおかげで、広報Gはなんだか夏よりも熱いような気がします。この調子で寒い冬も乗り切ろうと思います。Y先輩、どうぞ末永くお幸せに・・・！（ち）

淡青評論

七徳堂鬼瓦

学生との交流

教養学部の１年生が履修する英語Ⅰという授業がある。読解、聴解、作文力などを総合的に学ぶ授業で、英語部会の教員が自前ですべての教材を作成している。

私は授業で毎週使用するビデオに登場している。恥を忍んで、英語で下手な演技をしている。

英語Ⅰは必修だから、授業に出ている１年生は全員、毎週私を見ることになる。

ということで、私の顔は東京大学の学生にかなり知られている。東大限定の「有名人」に過ぎないのだが、それでも困ったことがしばしば起こる。キャンパスを歩けばジロジロ見られるし、「英語Ⅰだ！」「ユージンだ！」と声をかけられたり、ときにはなぜか「握手して！」「一緒に写真とって！」などと追いかけられたりすることもある。「タレントじゃないんだから」と断ると「ユージンは東大のユーメイジンだよ」と茶化されることも。

学外でもうかうかできない。ある晩、吉祥寺の食堂で定食を頼んで、ご飯に納豆をかけていたら、突然、隣に座ったカップルに「英語Ⅰの先生ですよね」と話しかけられて途方に暮れたこともある。

一方、悪いことばかりではない。学生がキャンパスで気軽に英語について尋ねてくるし、授業に行っても知らない顔ではないからか、以前より学生がリラックスしていて、英語のディスカッションなどがしやすい。吉祥寺の食堂で会った東大生とも、結局は会話が弾み、楽しい夕食となった。英語Ⅰビデオのおかげで、ずいぶんと学生と交流を持つことができた。

現行の教材はそのうち改訂されることになるし、いずれにせよ今の私はビデオ撮影時と違い、年を重ねて白髪が増えているので、そのうち学生は気づかなくなるだろう。東大生に指をさされず、気軽にキャンパスの内外を歩ける日を楽しみにしている。

けれども、学生とのビデオを介した交流がなくなるのは、ちょっぴり寂しい気もする。学生と触れ合うことこそが教員の醍醐味、これからは別の手段で顔を知ってもらい、東大生の英語力向上に貢献したいと思っている。

矢口祐人（大学院総合文化研究科・教養学部）

（淡青評論は、学内の教職員の方々にお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。

No. 1392　2009 年 11 月 20 日
東京大学広報委員会

〒 113-8654
東京都文京区本郷７丁目３番１号
東京大学本部広報グループ
TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
http://www.u-tokyo.ac.jp